



---

# 天女と軍神列伝

---

稀代の武人に愛された天女



## 砂漠の桃源郷

北を燕と北臨、山を西夏。南を晋と涼それぞれが群雄割拠。砂漠と草原には少数民族が点在する乱世の時代。

砂漠の民には、濃霧に覆われる月牙泉、陽華泉の向こうには桃源郷が広がり、巫族が隠棲していると伝えられている。そして各国君主には

「天女を得るものは天下を獲る。」

と信じられていた。

各国皇宮では派閥による勢力争いで暗殺や毒殺が横行し、まさに内憂外患、乱世だった。

北の燕では皇太子の座を十四人の皇子と妃が争い内紛が激しくなっていた。

燕に嫁いだ晋の公主、陽蓬妃は文武両道、才色兼備。美しい藍色の衣を羽織り、駿馬を駆る姿は羨望の的であり、燕の皇帝から格別に寵愛された。

二歳になる皇子玉謹は楊法將軍に武芸を、軍師陳郁に兵法、文官海照に学問を習い、師が驚愕する速さで習得していった。

母に似て容姿は美しく体躯に恵まれた玉謹は宮中の人気を一身に集め、皇帝からの愛情を独占していた。

皇后からは皇太子の座を脅かすとして母子ともに疎まれ緊張する日々だった。皇帝はそれを案じて陽蓬妃、玉謹とも晋からの重臣衛星とその配下を護衛に命じた。

「陽蓬妃様、ここ数日後宮に不穏な動きがあります。皇后の配下がこの宮殿の外に配置されるようです。今晚襲撃が予想されますのでわたしとともに備えますように。」

「衛星殿は玉謹を連れて燕より離れ晋に向かうように。この子を争いに巻き込みたくありません。必ず脱出してください。」

「はい。」

夜更けに多勢の禁衛が陽蓬妃宮殿に攻め入る。衛星は眠る玉謹を紐で背中に括り外套を羽織る。両手に剣を携え禁衛を斬りつけ、駿馬に跨り城を脱出。荒涼と広がる砂漠を超えて晋に向かう。

「陽蓬妃様を晋へ。」

衛星は配下の兵に叫び、走り去った。

襲われた陽蓬妃は、衛星の背中に括られた玉謹が馬で脱出する姿を見届け息絶えた。

「どうか無事に生き延びて欲しい……。」

衛星は優れた騎手であり、駿馬を自在に操る。到底後宮の禁衛軍では追いつけるはずがない。数日分の食料と水、防寒着を携え月牙泉を目指す。砂漠には洞窟が点在し、水源である月牙泉の近くにある洞窟で宿営する。驚くことに玉謹皇子はすやすやと眠ったままだ。あの死闘のさなか泣くこともなく、無事に脱出できた。晋の宝と敬われる陽蓬妃の血が流れている。

痛みが走る。緊張のせいか気づかないうちに脇腹を剣先がかすめたのか負傷していた。

葉草を塗り込み布を巻く。

すると血の臭いを嗅ぎつけたのか獣の唸り声が・・・

水源豊かな洞窟の入口に狼の姿が見える。

「砂漠の住人が集う洞窟に先客か。」

月明かりに人影が浮かぶ。女の声だ。

狼の唸り声に反応して玉謹が起きた。

「ここはどこ。衛星、母上は・・・。」

「子供がいるのか。どうしてここに。」

「燕の皇后の急襲から逃げて晋に向かう途中です。」

「燕か晋の武人だな、名乗れ。害を与えるつもりはない。負傷している様子、幼児を連れての野営は急激に冷える洞窟では危険だ。」

「晋の将軍、衛星です。陽蓬妃の護衛として燕にいました。こちらは玉謹皇子です。」

「内紛の犠牲だな。集落に案内する。まずは身体を温め、食事、そして治療だ。」

女子は神獣のような狼2頭を従えて先を歩く。衛星は玉謹を背負って馬を連れて追う。

女子が月牙泉の畔に立つといきなり濃霧がはれて泉の中央に橋が現れた。

その先に集落が浮かんでいた。

「これは・・・。」

「ここは巫族の村だ。」

「伝説は本当だったのか・・・。」

上空には鷹が羽ばたいている。女子は狼に跨り走り出した。衛星は馬に跨り後を追った。

桃源郷との言い伝えは本当だった。暖かく、木々が茂り、花が咲き乱れる。

「衛星、ここは？天女様の国なの。」

「わたしにもわかりません。」

「玉謹様、ここは巫族の村です。晋までは遠い。衛星殿の傷を治し英気を養ってからでもいいでしょう。ここには玉謹様と同年代の子供がいますよ。」

「狼に乗ってもいいですか。先ほどあなたの姿を見てぜひ背に跨ってみたいと思います。」

「狼貴と狼華はこちらへ。」

2頭の神獣は衛星と玉謹の前に伏せる。

「穏やかな狼華がいいでしょう。」

前に立った狼華に衛星が玉謹を乗せた。

「しっかりつかまって。狼華、ゆっくり進むように。」

玉謹は首につかまりしがみつく。ゆっくり歩く狼を撫でながら

「狼華、乗せてくれてありがとう。」

と抱きしめた。

衛星の傷は深く、巫族に伝わる薬草によって治療する。

「命の恩人であるあなたのお名前をお聞かせください。」

「わたしは翠月です。」

翠月は美しく輝いていた。まさに天女だ。

疲弊する乱世から民を救い平安をもたらすといわれる天女に間違いはない。

玉謹は集落の子供、狼と鷹と遊ぶ毎日だ。ここは温暖で食事も美味しく、豊饒な土地を活用した自給自足。農法、工法あらゆる分野が進化した生活が営まれている。世の君主憧れの治政だ。

回復した衛星は巫族の長のもとを訪れた。

「翠月殿に助けられ、毎日治療していただき傷も癒えました。おかげさまで十分養生し、玉謹様もあの通り元気で、ありがとうございました。ご恩は必ずお返しします。」

「晋の衛星將軍、燕の玉謹皇子ですね。陽蓬妃は亡くなりました。残念です。燕は益々内紛が激しくなります。玉謹様は晋で育てるのがいいでしょう。」

「はい。素晴らしい妃を亡くしました。もう玉謹様を争いに巻き込みたくありません。それは陽蓬妃様の願いでもあります。」

「わたしたち巫族は予知力を生かし、乱世を平定し明君を生み、民のための治政を助けます。ある暴君に裏切られ、絶滅に追い込まれましたが何とか逃げ延びて隠棲しました。ここ砂漠は数十年程になります。」

「そうでしたか。伝説と信じていました。」

「玉謹様は素晴らしい君主になるでしょう。育てるのは衛星殿です。晋に戻り陛下に玉謹様の生存を話し、皇宮から離して育てなさい。」

皇宮や後宮には陽蓬妃の子であることは決して知られないことです。

衛星殿は鎮北王、大將軍として、皇帝より兵権を預かり三軍を率いることになります。玉謹様は跡取りです。」

「それは大変な重責です。晋へはわたし一人で向かい陛下に報告することにします。玉謹様をよろしく願いいたします。」

「翠月に任せましょう。だいぶ懐いているようです。玉謹様には鷹も狼も遊び相手のようです。」

## 翠月と鎮北王

「翠月殿、玉謹様をよろしくお願ひいたします。わたしは晋に戻り、玉謹様をお迎えに上がります。願わくば翠月殿と共に晋で玉謹様をお育てしたいと思います。どうかわたしとのかことを考えてみてください。」

そう言い残して衛星は晋へと向かった。

衛星は美しく才知に溢れ、武術に優れた翠月に魅かれた。医術の心得があり献身的に看病してくれた。玉謹様があれほど懐くとは・・・翠月殿のおかげで母上を思い出し泣くこともなくなった。叶うなら晋で共に暮らしたい。

数年前、翠月は草原で馬を駆る陽蓬妃と衛星に会った。燕に嫁いだばかりの頃だ。妃に想いを寄せる衛星の瞳は熱く、妃は頬を染めてその想いに応えるようだった。

翠月は颯爽と馬を駆る衛星に魅了された。衛星に軍神の未来を見た翠月は、いずれ彼と再会することを予知した。

「翠月は将来、軍神に出会い、乱世を共に渡っていく波乱の運命だ。」

と幼い翠月に巫族の長が言った。その軍神とは晋が誇る衛星將軍なのか。

そして燕から砂漠に入った衛星を追って洞窟で再会した。

玉謹様を迎えに来たその時は共に晋に行くことと決めた。たとえ険しくともだ。

衛星は帰還したその日に、報せを受けた皇帝から呼ばれた。

「陛下、戻りました。」

「燕の内紛を報告してくれ。」

「どうか人払いをお願いします。」

侍従、文官、護衛をすべて下がらせ二人になる。

「陛下、燕の内紛によって陽蓬妃の宮殿が急襲されました。燕王の寵愛を一身に受け、皇子玉謹様の人智と才に嫉妬し抹殺を計ったようです。陽蓬妃様の命で玉謹様を連れ晋に向かう途中で砂漠の民に助けられました。いま玉謹様はそこに匿われています。ご安心ください。」

「陽蓬は・・・。」

「お亡くなりになりました。晋でも玉謹様が陰謀に巻き込まれないように陛下に懇願すると言ひ残されました。」

「後宮の争いは陰湿で防ぎきれない。衛星、玉謹を任せてもよいか。幸い皇宮や後宮に縁戚もなく、軍神として敬われている衛星に手出しする者はない。今回の功績で鎮北王、大將軍として三軍の指揮、全ての兵権を一任する。屋敷も移るように。」

「はい。拜命いたします。」

「ほかに何か願ひがあれば聞かぞ。」

「娶りたい女子がいます。鎮北王妃を迎えることをお許しください。文武両道で才知に溢れ玉謹様が大変懐いています。」

「縁戚を避けるならそれもいいだろう。婚礼の儀は任せるがいい。いずれ王妃に会ってみたい。」

「お許しがいただければ、準備を整えてから玉謹様を迎えに行きます。」

衛星は鎮北王として相応しい屋敷へと移り改修に入る。

玉謹様、翠月殿の館に大広間、執務室、客間、侍従、侍女の部屋に兵舎。

巫族の村のように木々や花を植え美しい庭園を。

將軍府らしく厩、武器庫も備えた。

屋敷の細かい設えは翠月殿に任せよう。

多勢の選ばれた人工によって三カ月ほどで何とか形になった。以前から仕える使用人も入り、増員は侍従長に一任した。

桃源郷での暮らしは玉謹にとって最高に楽しい毎日だった。素晴らしい師に恵まれ、3歳になる玉謹はあらゆる学問、武術を習得。巫族の子供は文武両道の強者揃いだ。

幼い玉謹にも容赦ない。口惜しさと情けなさから益々揉まれ強くなる。

河原で水遊びを楽しむ玉謹が、浅瀬の急流に足を取られ流された。溺れる玉謹をまだ3歳の水心が飛び込んで捕まえる。幼い身体は流れにのまれながら下流へと流されていった。水心は決して玉謹を離さなかった。

下流に浮かぶ2人は、水心の兄龍泉に助けられ、先に玉謹が息を吹き返した。玉謹を抱えながら流れにのまれた水心は意識が戻らない。水心が飛び込まなければ玉謹は溺れ死んでいた。水心は天災から民を守る水の精、天女の子孫だ。

玉謹は二晩昏睡する水心の傍を離れなかった。水心は命の恩人だ。自分と同じ小さな身体なのに命がけで助けてくれた。これからはわたしが水心を守ると誓った。涙の痕で頬が瘡蓋になった3日目に水心は目覚めた。玉謹を抱えていたせいで腕を骨折したがもう心配ないという。

「水心、ごめんなさい。そして命を助けてくれてありがとうございます。これからはわたしが水心を守ります。この恩は必ず返すから。」

「玉謹は怪我していないの。よかった。わたしは泳ぎが得意だから大丈夫。玉謹もきつとうまくなる。それに龍泉兄がいる。頬が瘡蓋になっているよ。泣き虫だなあ。」

玉謹は水心の手之母の形見の簪を握らせた。

「これを持っていてね。そしたらまた会えるから。」

「この腕輪を玉謹にあげる。わたしの母の形見よ。いつ会ってもお互いがわかるね。」

まだ玉謹の腕には大きい、深緑に輝く翡翠の腕輪を握りしめた。

馬車2台、護衛20名と侍女10名が騎乗し砂漠に向かった。旅籠一棟を借り切り一行を置いて衛星一人で月牙泉に向かう。

霧の向こうに巫族の長と翠月、水心、龍泉、玉謹皇子、狼貴、狼華が待っていた。

「玉謹様、お迎えに上がりました。族長、翠月殿を連れていくことをお許しください。大切にします。」

「この乱世に翠月は鎮北王の助けになるでしょう。玉謹様はここ3カ月で学問、武術をさらに習得。巫族の師が驚く速さです。立派な軍神に育ちます。医術、芸術は翠月が教えるでしょう。」

「すでに鎮北王に任命されたことはご存じでしたか。」

「翠月は予知力を持つ天女です。軍神である衛星殿の片腕として百戦百勝でしょう。どうか大切にしてください。」

い。」

「わたしには過ぎたる女子です。」

「衛星様、狼貴、狼華を連れて行きます。戦には三軍以上の働きをします。それに玉謹様の護衛です。」

「翠月殿の好きなように。」

「衛星、わたしに父上と母上ができたのですね。衛星が父上で翠月様が母上です。族長は祖父ですね。これからは父上、母上、おじいさまと呼びますので、皆様、わたしを玉謹とお呼びください。そして龍泉兄も。」

「はい。しばらくは慣れませんが、燕王と陽蓬妃のお子と知られないためにもそうさせていただきます。お許してください。」

「水心、必ず迎えに来るからね。」

玉謹は腕輪を見せながら笑顔を向けた。

「待っている。」

水心の髪は玉謹からもらった玉の簪で結われている。

「それではお気をつけて。」

「お世話になりました。このご恩は胸に刻みます。」

玉謹は翠月に抱かれて愛馬月牙に騎乗。何度も後ろを振り向き、龍泉と水心兄妹に手を振っていた。

「月牙ですか。立派な黒馬ですね。」

「はい。仔馬から育てました。どの馬よりも速く走ります。晋では玉謹様の仔馬をお願いします。騎馬の稽古を始めます。」

「いよいよ3人の生活ですね。」

旅籠で待つ護衛と合流し、一行は鎮北王の屋敷へ。神獣2頭は馬が騒ぐので列から離れて翠月と玉謹を護衛する。

## 鎮北王妃 翠月

「旦那様のお戻りです。早く旦那様のお出迎えを。」

門番の声で屋敷中の者が表門へと駆け出す。

「沐浴と着替え、食事の支度を頼む。こちらは翠月、鎮北王妃となる。そして玉謹、わたしの息子だ。」

「旦那様はいつの間に。それにお子まで。」

「詮索はいいから早く支度を・・・。」

「だんなさま。大きな猛獣が2頭・・・。」

「妻子の護衛だ。味方には大人しいから安心するように。大量の肉がいる。すぐに市場で求めよ。それから馬の世話も頼む。」

「母上、わたしは川で溺れて死にかけました。水心と龍泉が命懸けで助けてくれたのです。」

「聞きましたよ。水心と龍泉がいて何より。あの兄妹でなければ助けられなかったでしょう。二人は水神だから。」

「はい。これからはわたしが水心を守ると約束しました。お互い母上の形見を交換したのですよ。また会えますよね。」

「会えますよ。運命がそうさせます。これは玉謹の腕にはまだ余るようですね。外れなくなるまで大切にしまっておきなさい。」

玉謹はやがて母親の仇である燕を滅ぼすだろう。天女である水心、軍神である龍泉がいればそう遠くはない。玉謹は衛星を超える軍神になり晋を繁栄させる。

玉謹と兄妹との再会はいつか。

1カ月かけて衛星と翠月の婚礼の準備だ。鎮北王の屋敷には皇宮からの結納品が次々運び込まれる。美しい婚礼衣装に翠月は見惚れた。

深紅の衣は金の刺繍が華やか、美しい翠月が羽織ると侍女が感嘆の声を上げた。

「奥方様の美しさは言葉にできない・・・です。誰もが憧れる天下の大將軍は、翠月様を絶対に離しませんよ。」

婚礼は鎮北王府で、各將軍、その部隊が参列し、皇宮、後宮からの列席者はいない。

武人の将らしい婚礼となった。

「さすが大將軍。天女のように美しい奥方様だ。鎮北王付きの白起將軍が羨ましい。」

「わたしも毎日奥方様を眺めていたい。」

「玉謹様も素晴らしい軍神になるだろう。」

と将兵から称賛の聲が上がる。

華やかに装飾された寝所には面紗を付けたままの翠月が。

「翠月殿、やっと解放された。」

衛星は翠月を抱き上げ寝台に座らせる。そして花嫁翠月の面紗を取る。

「わたし衛星は、翠月殿を心から愛し、生涯大切にすると誓います。」

「衛星様、わたしだけを見てください。側室を迎えるなら離縁します。他の女子を抱いたら村に帰ります。生涯わたしだけを愛すると誓いますか。」

「翠月殿、わたしには翠月殿しかいない。どんな時も離れず傍にいて欲しい。」

「はい。どこまでもお伴します。」

衛星は翠月と向き合いゆっくりと顔を近づける。翠月は目を閉じた。衛星は翠月を抱き寄せ口づけを交わす。

「翠月とお呼びください。」

「衛星と呼んでほしい。」

衛星は翠月をゆっくり寝かせ自身を重ねた。

まるで陶器のように輝く肌を余すことなく堪能する。唇から漏れる官能的な喘ぎ声にさらに欲望を掻き立てられる。やがて二人は溶け合うように一つになった。

鎮北王となってここ1年程は天候不良によって食糧が不足し、兵も農耕に従事。そのうえ衛星が配置した精鋭軍によって晋の国境を脅かす国はなく平穏だった。

鎮北王の屋敷では、広い敷地を利用し、翠月が畑を耕し作物を育て、医術の知識で薬草園を。川の流れを自在に操る水車を設営して梅の苗を植える。梅林を育て梅酒を造るのだ。

天候を予知する翠月が育てる作物は成長が早く二毛作ができる。

麓の村に出向き、蚕を育て機織りを教えて衣を作る。

窯を造り窯業を指南し、鍛冶場を設営し馬蹄や武器を製造する。

鎮北王府の周囲には貧しい村から流れてきた民で集落ができ、市場には豊富な品々を求め各国から商人が集まり交易が盛んになった。

村人は鎮北王妃である翠月を、戦で疲弊した民を救う天女として崇拜した。

やがて皇宮までその話は届き鎮北王が皇帝に召された。

「衛星、天女といわれる王妃に会いたい。玉謹と共に会わせてくれ。」

「はい、そのつもりです。王妃のおかげで貧しい村が生き返ります。市場も賑わってきました。玉謹様は文武両道、容姿端麗で陽蓬妃様の血が隅々まで流れているようです。仔馬が欲しいというので、ぜひ陛下の命で王宮の馬屋から仔馬を一頭譲っていただけますか。」

「どれでも連れて行け。玉謹の為なら何頭でも構わないぞ。」

「ありがとうございます。」

「近いうちに武術と騎馬を競う催しがある。ぜひ参加するように。男子、女子、子供に分かれて競う。玉謹はいくつになる。」

「そろそろ4歳かと・・・。」

「まだ無理だろうな。」

「いえ、相当の腕です。ぜひご覧ください。」

「陛下から武術と騎馬の試合に翠月と玉謹も参加するようにとのことだ。どうする。」

「玉謹の騎馬や武術は非凡です。ぜひ参加しましょう。晋に女子の武人が多いとは。」

「いや聞いていない。将軍家のご息女が数名ほどかな。」

「衛星様は参加するのですか。」

「男子は若手が中心だが陛下の命があれば思い切り暴れるつもりだ。」

「では大將軍の名に恥じぬよう、玉謹にはさらに騎馬を教えます。」

「陛下も喜ぶだろう。ところで狼貴と狼華の姿が見えないが。」

「日中は裏山で狩りをしながら過ごし、日没とともに警護に屋敷に入ります。平穩が何よりです。」

## 玉謹と翠月

いよいよ試合が近づく。衛星と馬を駆る翠月は名騎手といわれる衛星と互角だ。仔馬に跨る玉謹は自在に操り騎乗の剣術も見事だ。

「衛星様、玉謹とわたしの衣を作るので裁縫師をお呼びください。それと藍色の濃淡の生地をお願いします。巫族の天女に伝わる衣を作ります。」

「何着でも好きに作りなさい。侍従長に指示しておく。」

翌朝、城下から裁縫師が藍色を濃淡に染め分けた生地を持参し屋敷に入った。

翠月と玉謹の採寸を終えて翌日各3着持参するとのことだ。

玉謹は射的が得意だ。非力ではあるが軽量で小振りに改造した弓矢で確実に的を射る。

翠月仕込みの騎乗しながらの射的や剣術も見事だ。

皇宮から離れ、縁戚もない鎮北王の息子であれば、文武両道であっても君主との縁も無く命の危険もない。

見慣れない衣を纏って衛星の前に立つ翠月は輝く美しさだ。藍色の濃淡に分かれた衣を重ねて羽織り、動きに沿って胴から布が幾重にも広がり、まるで天女の羽衣のようだ。衛星はしばし翠月の美しさに見惚れた。男児用は薄色から濃色を重ねて羽織り、広がりや抑えられ、動きやすいよう丈が短めだ。玉謹の愛らしさと利発さが際立つ衣装だ。

「衛星様、いかがですか。」

「いや、美し過ぎて声も出ない。」

衛星は翠月を抱き寄せ、口づけをする。侍女が顔を赤らめ俯く。

「父上と母上はいつも愛し合っていますね。わたしの衣も見てください。」

「玉謹はまるで大將軍だ。陛下も驚くぞ。」

「母上の美しさは天下一ですね。」

馬車に乗り込み、それぞれの愛馬は御者に牽かれ、白起將軍を先頭に、護衛の騎馬と共に皇宮に向かった。

皇帝に拝謁する衛星、翠月、玉謹。常人とはかけ離れた美しさの翠月と、堂々とした玉謹、そしてまるで天女の羽衣のような華やかな衣装に皆見惚れた。

「まさに鎮北王妃は天女だ。それにしても見目麗しい衣を羽織る姿は、まるで美しき軍神だ。翠月殿も参加するのか。女子がいないので男子と競うのがいかか。」

「陛下のお気遣いに感謝します。殿方に交じって悪戦苦闘させていただきます。玉謹の射的と騎馬もぜひご覧ください。」

「衛星、楽しませてもらうぞ。」

「はい。」

速さと正確さを競うのが、騎乗して弓矢で的を射る射的。  
騎乗しながらの剣術は、相手が落馬するか剣を離したら負け。  
各将隊で戦う馬球試合が最後を飾る。  
皇帝の周りには着飾った皇后や妃が連なり翠月を睨む。  
衛星はどんなに美しいといわれる後宮の妃であっても、天女翠月の輝く美しさの足元にも及ばないと確信する。  
それは陛下をはじめそこにいる男子すべての本意だろう。

騎馬の射的で翠月は全矢的中。最後は走る馬上に立って2本まとめての射的。誰もが驚き、称賛し、負けを認めた。

騎乗の剣術では、晋で衛星と並ぶ李忠將軍が相手だ。翠月は月牙に跨り、宙を舞い、將軍の剣を巻き上げ、走る月牙の馬上にぴたりと着地する。攻撃範囲の広い翠月にはさすがの武人もかなわない。

「翠月殿、勝負あり。」

「翠月の騎乗は見事だ。褒美をやるぞ。」

「恐れ入ります。通常の剣術では到底將軍には勝てません。詭計を凝らしてみました。李忠將軍、お相手ありがとうございました。」

「いや、戦でもここまで馬上で剣が扱えれば怖いものなしです。素晴らしい。こちらこそいい経験になりました。」

「衛星、鎮北王妃は見事だぞ。」

「はい。わたしもこれほどまでとは・・・驚きました。」

玉謹は仔馬玉牙に跨り、射的はすべての中。

騎乗しての剣術では、母と同じく馬上から高く跳ね上がり相手に剣先を突き付け、走る馬に着地。人馬一体となる剣術は大人顔負けだ。

「4歳というのが信じられない。衛星、玉謹の馬術は母親譲りか。」

「はい。仔馬と年少という弱点を、軽量が生きる馬上の跳躍と、剣先で突く戦法で補ったようです。」

「衛星を超える軍神になるな。玉謹は何が欲しい。」

「もう少し大人になったらお願いします。まだわかりません。」

「いつでも言うがいいぞ。」

衛星は翠月と玉謹を理由に宴席を断り帰路についた。宴席では翠月と玉謹の話題で持ちきりだろう。皇宮に縁戚もない衛星はひとまず安心だが、兵権を持つ衛星を恐れる文官も多い。ともかく武人として平時の政からは離れていたい。

## 涼国の真月

草原の国「涼」、山と砂漠の国「西夏」。厳しい気候の西夏は、度々涼との国境に攻め込み食糧の略奪を重ねていた。西夏の兵は気性が荒く狡猾で手強い。食糧危機に襲われる度に涼の領地に侵略するのだ。

涼の武神といわれる秋虎大將軍は、国境に軍營を設け西夏軍の襲撃に備える。

砂漠と草原の境界で、西夏の嘉慶王子と交戦した秋虎大將軍は、精鋭部隊 500 騎で西夏軍を山へ追い返した。帰路は砂嵐に巻き込まれ秋虎軍の新鋭部隊 50 騎が立ち往生、嵐が去ったあと砂漠に取り残されてしまった。

「大將軍、このままでは水も食糧も尽きます。砂漠の民によると周辺に陽華泉があるはずですが砂漠しか見えません。」

「洞窟を探せ。そこで休むぞ。」

上空に 2 羽のハヤブサが舞う。先方に人馬の姿があった。

「砂漠で方向を失ったのか。」

「はい。」

「わたしについてくるがいい。」

真っ赤な衣に覆われた女子の上空にハヤブサが舞っている。

女子が馬から降りて天空を仰ぐと、砂煙がはれて陽華泉が広がった。

「泉の周辺は牧草地がある。人馬共に休んだら国境までの道案内をしよう。」

秋虎の兵は女子の後を追った。陽華泉の周辺は牧草地で温暖、別世界だ。

「砂漠にこんなに緑があるとは。」

澄んだ泉の水は疲れた身体に染み渡るようだ。馬は牧草を食む。

「わたしは涼の秋虎大將軍です。命の恩人のお名前をお聞かせください。」

「涼の秋虎大將軍か。わたしは真月、砂漠の民だ。」

「上空に舞うハヤブサを操り、陽華泉に案内するあなたはまるで伝説の天女だ。」

真月と名乗る女子は、いままでに見たことのない美しさだった。大きな瞳、透き通る肌、衣から透ける伸びやかな肢体。秋虎は見惚れるばかりだ。

砂漠の民ではない。ここは陽華泉、伝説の巫族だ。

「わたしが案内する。」

一行は真月の先導で無事に砂漠を抜け、涼の国境まで辿り着いた。

「真月殿、あなたは命の恩人だ。この玉牌を見せれば將軍府に入れます。必ず訪ねてきてください。ゆっくり御礼がしたい。」

秋虎は真月に自身の玉牌を渡した。

真月は涼国に入る秋虎の姿を追いながら、涼の軍神との未来を確信した。

真月はハヤブサを伴に、天象を予知する天女だ。

秋虎は美しい真月を涼に連れて行きたかった。無骨な武人が砂漠の女子に惚れたのだ。どうか良縁であって欲しいと願うばかりだ。

秋虎は各国に知られた武神だ。眉目秀麗で若くして戦功をあげ、大將軍として兵権を預かる涼国の若き英雄だ。

巫族に生まれた天女は、稀代の軍神と結ばれ乱世を治め平安をもたらし、民を救う使命がある。晋には最高位の天女、翠月がすでに存在する。やがて晋と涼は天女によって盟約を結ぶことになる。真月は近いうちに涼に入ると決めた。

砂漠から涼に入る。真月は愛馬真泉を引き、関門で秋虎大將軍の玉牌を見せた。慌てた門番はすぐに馬で走る。

「お待ちせしました。將軍府までご案内します。馬はこちらで引きますので馬車で。」

街は人で賑わい、物が溢れていた。砂漠とはまるで別世界だ。真月は胸が躍る。

馬車を降りると、大門の前に秋虎が立っている。

「真月殿、よく来てくれた。まずはゆっくり休んでください。」

「お言葉に甘えてこちらに来ました。こんな賑わいは初めてです。」

「支度はすべて侍女にお任せください。部屋は用意してあります。」

深紅の衣を羽織る真月殿はとても美しい。数か月のうちにさらに輝きを増している。

沐浴をし、身なりを整え改めて秋虎の前に立つ。各將軍や侍従はただただ見惚れた。

「支度をする侍女も驚くばかりでした。屋敷中皆、真月様に見惚れています。」

「真月殿、心ゆくまでここにいてください。」

「はい。愛馬真泉のほかに伴がいます。」

真月が笛を吹くと正門に2羽のハヤブサが止まる。

「あれは確か砂漠で・・・。」

「はい。月兎と陽兎です。地上の動きを察知し、天象を読み、敵を一撃で仕留めます。」

「さすが天女。猛禽を従えるとは。」

翌日、真月は侍女と街に衣を作りに向かった。胴元から幾重ものひだが優美に広がる天女の衣だ。真月は紅色の濃淡の生地を好む。

初めての衣に裁縫師は戸惑いながら、翌日3着ほど仕上げて届けることを約束した。

將軍府の注文は最優先だ。

「気に入った衣が作れそうか。」

「はい。千年も前から村に伝わる衣です。晋の鎮北王妃も同じかもしれません。」

「え・・・鎮北王妃を知っているのか。」

「さあ、まだお会いしていません。」

「真月殿は武人。射的、騎馬、劍術ともに敵う者がいません。最上級です。」

屋敷の裏に広がる修練場から、慌てて兵が報せに来た。

秋虎は修練場に急ぎ向かった。そこには走る馬上から弓を放つ真月の姿が。見事だった。

深紅の衣が幾重にも宙に広がり、馬上を舞う姿は俗人にはない美しさだ。

騎乗しながらの剣術はまるで剣舞のよう。ぜひ戦で見たいものだ。

天象を読み戦略を立て、武術も一流。まるで女諸葛亮、軍神だ。

## 涼と西夏

「嘉慶王子、そろそろ冬に向けて食料を備えなければ。国境の街をいくつか攻め落としましょう。」

「秋虎の軍は手強い。北の関門を避けて西から攻める。西を守る謝達の兵は秋虎ほど強くはない。」

「どう攻めますか。」

「謝達は若い秋虎の出世と軍力を快く思っていない。いま攻め込めば功を焦り、一齐に兵を仕掛けるだろう。500騎の先発隊で挑発し、誘い出す。3万の伏兵を置き、待ち伏せして挟み撃ちだ。その隙に2万の兵で関門を突破し街を墜とす。一気に占領するのだ。」

「では3日後、兵を整え夜明けとともに奇襲をかけましょう。」

「秋虎様、3日後に西夏軍が西の関門を突破します。謝達將軍が危険です。兵を誘い出し伏兵で挟み撃ち。その隙に手薄になった関門から街を占領する策です。」

「本当か。いまからでは間に合わない。」

「街が墜とされたら時期を見て奪い返せばいいのです。まずは挟み撃ちされる謝達將軍と兵を救うのです。このままでは3万の精鋭兵を失います。」

「西の国境に向かうぞ、軍令だ。」

「はい。」

「秋虎様、ハヤブサが西夏軍の位置を知らせます。最短で向かいましょう。月兎、陽兎、頼んだぞ。」

秋虎と真月、そして秋虎軍3万が砂漠に向かった。

「前後から謝達軍を挟み撃ちする西夏軍を横方から攻撃。騎馬による隊列は横からの奇襲に脆弱です。左右から弓隊で攻撃し、歩兵とともに突進して敵を馬から引きずり下ろします。」

「陽西、南から政貴と2手に別れて1万の兵で西夏軍を攻めろ。海威と海星は北から2手に分かれて1万の兵で。わたしと真月は西から西夏軍を追っかけ攻める。ハヤブサが上空から西夏軍の位置を報せる。ハヤブサの真下が敵軍だ。行くぞ。」

「衛星様、3日後に5万の西夏軍が西の関門を急襲し謝達將軍が追い込まれ、涼の秋虎大將軍が3万の兵で反撃します。涼が敗れることにでもなれば、嘉慶王子はすぐに晋を攻めるでしょう。狼貴と狼華を連れて偵察に行ってきます。」

「わたしが白起と500騎ほどの精鋭を連れて行こう。」

「道案内が必要ですね。」

翠月が空に向かって笛を吹くと、大きな鷹が鎮北王府正門屋根に舞い降りた。まさに最大級の猛禽だ。

「これは・・・。」

「泉兎です。天象を読み、敵の動きを報せます。そして馬上の敵を一撃で仕留めます。狼同様、戦友です。わたしの指示でしか動きません。」

空から泉兎、先導が狼貴、狼華。翠月、衛星、白起と500騎の精鋭部隊で戦場に向かった。

## 翠月と真月

真月と秋虎は後方から西夏軍を追う。

左右それぞれ2方向から涼軍、前後西夏軍に挟まれた謝達軍。砂煙と共に人馬が入り乱れての激戦だ。左右から攻める涼軍は西夏軍を蹴散らし戦況は有利だ。深紅の鎧を纏い、駿馬で一気に軍衆を駆け抜けるのは真月だ。その先に最強といわれる嘉慶王子の兵2万が待ち受ける。嘉慶王子との衝突は避けるべきだ。

翠月と精鋭隊は小高い丘から戦況を偵察。

翠月は真月の姿を捉えた。

「月牙、狼貴、狼華、行くぞ。泉児、敵兵の位置を報せよ。」

翠月は一気に駆け下りた。

嘉慶の視線の先に、馬が立ち上がり、兵が墜とされ、それをかき分けながら真っ黒い大きな塊が突進。そのあとに馬上から西夏軍を次々斬り倒していく藍色の軍服を捉えた。

嘉慶は軍隊の前線に立ち、藍色の兵と向き合った。

兜も鎧もつけず大きな黒馬に跨り、両腕に剣を携えた女子だ。両脇には2頭の神獣、上空には大鷹が舞う。

「嘉慶王子、西夏軍は涼だけでなく晋も攻撃するつもりか。すぐに砂嵐が襲う。ここは引いた方が良策ではないか。」

翠月の問いかけに西夏の梁李将軍が叫ぶ。

「その声は女子、ここで討取ってみせる。」

翠月に攻撃を仕掛ける。

「やめよ。梁李が敵う相手ではない。」

嘉慶の制止も聞かず翠月に突進するが、馬上から跳ね上がる翠月に一撃を交わされ、翠月の剣で首を刺され馬から落ちた。あとに続く数騎は狼貴、狼華に喉を噛み切れ即死だ。

「軽拳は慎め。敵う相手ではないのだ。」

嘉慶は叫ぶ。後方に晋の鎮北王が見えた。

「ここは引き下がるが西の関門は制圧した。進撃を覚悟しろ。」

西夏の軍は山へ引き返していった。

「翠月、なんて危ないことを。それにしても見事な戦いだった。さあ戻るぞ。」

「涼軍は。」

「無事に謝達軍を守り西夏軍を撃退した。西門は軍勢を立て直し奪還するだろう。」

「嘉慶と対峙したのは一体どこの誰か。」

「秋虎様、加勢したのは晋の衛星大將軍、先頭に立って攻め込んだのは鎮北王妃とのことです。神獣と大鷹を

自在に操り、容赦なく敵を仕留めるすごい武人です。」

「真月殿、ケガはないか。」

「はい。秋虎様、涼兵は見事でした。」

「真月殿の騎乗の攻撃は凄まじい。敵に回したくはない。戦略も見事だ。」

秋虎は最上の軍師で武人である真月に惚れこんだ。こんな素晴らしい女子に出会えたのは最高の幸せだ。

真月は実に戦場が似合う女子だ。わたしに気づいたはず。近いうちに秋虎大將軍とともに鎮北王府を訪れるだろう。

翠月は天女真月の来訪が楽しみだ。

すぐに地鳴りとともに砂嵐がやってくる。

## 西夏王子 嘉慶

砂漠にはいくつもの部族があり、それらを西夏王が治めている。後継者争いが絶えず部族間の争いも頻繁だった。西夏王は皇后、5人の側室に5人の王子、3人の王女がいる。

嘉慶は文武に優れ5歳から叔父の將軍府で育った。やがて兵権を手にする嘉慶を恐れ、刺客が送り込まれた。

10騎の刺客に追われ、矢傷を負って砂漠に逃げる嘉慶の前方に人馬の影。

「傷が深い。追われているのか。」

「はい。すぐに追手が・・・。」

藍色の衣を着た女子が馬に跨り、両脇に神獣を連れていた。

「いたぞ。王子を殺せ。」

10騎が追いついたそのとき、上空から何者かが舞い降りて先頭の刺客を馬から落とす。

喉元から血が噴き出た。すぐに神獣2頭が襲い掛かる。残った刺客5騎が女子に襲い掛かる。女子は馬上から飛び上がり、刺客の剣を交わし、一気に5人を刺殺した。

嘉慶は出血で気を失いかけながら、女子の剣術に見惚れた。目の前が暗くなった。

嘉慶が目覚めると、砂漠の民に伝わる月牙泉の畔にいた。矢傷は手当され、神獣を枕に女子は眠っていた。起きた嘉慶に気づき神獣がうなり声をあげる。

「目覚めたか。傷は痛むか。」

「いえ、だいぶいようです。助けていただき感謝します。わたしは西夏の嘉慶です。」

「わたしは翠月。こっちは狼の狼貴と狼華。空には鷹の泉児がいる。ここ月牙泉は温暖で温泉がある。傷を癒すのにもいい。しばらく養生することだ。」

ここは砂漠の民に伝わる巫族の村なのか。

それにしてもなんと美しい女子だ。剣術、馬術に優れ、薬草の知識もあり、神獣と猛禽を従える、まさに伝説の天女ではないか。

数日養生し回復した嘉慶を、西夏の国境まで翠月は送り届けた。

「また襲われたら砂漠に逃げ込めばいい。必ず助けるから。」

「いや、もっと強くなって皇宮の敵を仕留めてから迎えに来ます。」

嘉慶は傷口に巻かれた翠月の手巾を、懐に入れた。

そして数年後、自分の前に翠月が立っていたのだ。一体誰とどこにいるのか・・・。

助けられたあの日、必ず翠月殿を迎えに行くと決めた。やっと会えた・・・。

すぐに翠月殿を西夏に連れて行く。嘉慶は大切な手巾を握りしめた。

あれは数年前に助けた西夏の嘉慶王子。文武に秀でた素晴らしい武人と聞く。西夏と戦うことになれば相当苦戦するだろう。彼も稀代の武神だ。鎮北王であれば必ず交戦する運命。晋や涼に山の国を治めるのは無理だ。西夏が他国の領地を侵略せずに山を治める策を練らなければ・・・。戦うだけでは平安はない。

翠月はできることなら嘉慶と戦いたくはなかった。

## 晋と涼と西夏

「偵察のつもりが交戦するとは。それにしても涼の秋虎軍は素晴らしい戦をする。深紅の鎧で駿馬に跨った女子は誰か。ご存じですか、衛星様。」

「いや、翠月に見惚れていたからな。」

「確かに翠月様は素晴らしい軍神です。晋の宝です。」

「わたしの、鎮北王の宝だ。」

「旦那様と奥方様のお戻りです。出迎えを。」

鎮北王、翠月、精鋭兵が鎮北王府に帰還。

「父上、母上お帰りなさい。」

「玉謹、母はただいま戻りました。すぐに沐浴の支度を。そして酒宴の用意もお願いします。」

玉謹を抱き上げ侍女に指示をする。

「馬の世話をお願いします。狼貴、狼華の食事も・・・。」

「はい。すぐに。」

夜遅く、酒宴を終えた衛星は翠月の寝所に。

「衛星様、どうしました。」

「ここで翠月と寝る。」

衛星は寝台に横になり、翠月を抱き寄せた。

「翠月の戦場での姿に見惚れた。死ぬときも共にありたい。絶対に離さないと誓った。」

「乱世を終わらせることです。いずれは燕が晋の国境を脅かすかもしれません。準備しましょう。」

「翠月の頭は常に回っているのだな。いまは隣のわたしだけを思っただけ欲しい。」

衛星は身体を起こし、翠月の唇に口づけをする。翠月は瞳を閉じて衛星に身を任せた。

涼の將軍府に秋虎軍が帰還した。

「いずれ軍略を立てて、西関門を奪還する。明日は酒宴だ。支度を頼むぞ。そして馬の世話をすぐに。」

秋虎は侍従長に指示をする。

「真月殿は腕の傷を軍医に診せるように。」

「大した傷ではありません。」

「傷跡が残ると美しい肌が台無しだ。軍医、早く治せ。」

真月はゆっくり湯に浸かる。戦の疲れを流したい。戦場の翠月様は美しく輝いていた。

早速鎮北王府を訪ねよう。このままでは永遠に西夏と争うことになる。早急に解決しなければ平安の世は来ない。

月明かりが美しい夜だった。

「真月殿、庭に出ないか。月が美しい。」

「はい。」

「素晴らしい戦いぶりに見惚れた。わたしは天女と共に生きる武神だろうか。」

「秋虎様は若き素晴らしい武神、各国にその名は知られています。眉目秀麗、涼国の女子の憧れと聞きました。妃候補がすごいとか。」

「わたしは文武両道、共に覇業を成し遂げる女子を娶ると決めている。そして真月殿は命の恩人でもある。こんな理想の女子は真月殿しかいない。わたしの妻になって欲しい。」

「……………」

「真月殿と生死を共にしたいのだ。一生大切にすると月に誓う。」

「大將軍の妻にふさわしい家柄でないのでは。皇宮から反対されるでしょう。」

「皇宮内に縁戚があれば、権力、派閥争いに巻き込まれるだけだ。わたしは武人、関わりたくない。それに真月殿は天女、誰もが妻にできない神々しさだ。わたしは命を助けられた時から、砂漠の天女に心底惚れたのだ。」

「天女は稀代の軍神と結ばれます。鎮北王妃の翠月様は天女です。わたしは涼の軍神、秋虎大將軍と共に生きることを誓います。」

「本当か。わたしの妻になってくれるのか。」

「わたしだけを愛すると約束してください。他の女子を抱いたら、わたしは涼を去ります。天女は他の女子と愛を分かち合うことは決してありません。」

「誓う。真月殿がいてくれたらそれでいい。」

「はい。」

秋虎は真月を抱き寄せ、頬を掌で包み込む。

そして唇を重ねた。真月はゆっくり目を閉じて秋虎を受け入れた。

「旦那様、涼の秋虎大將軍一行が城下に入りました。」

「翠月、白起、出迎えるぞ。」

鎮北王は、秋虎大將軍を迎えた。

「初にお目にかかります。涼国大將軍秋虎です。わざわざのお出迎え恐縮です。」

「晋の大將軍衛星です。こちらは翠月、妻です。そして將軍の白起とその配下です。」

一行は鎮北王府に迎えられた。

「衛星様、わたしは真月様に薬草園をご案内します。」

「それがいいだろう。翠月が育てた薬草園は見事だからな。」

衛星と秋虎は、紺碧と深紅に揺れる後姿を見送った。

「西夏との交戦の際には、ありがとうございました。嘉慶は最強の相手、翠月様のおかげで交戦せずに済みました。」

「嘉慶は涼の武神秋虎様に劣らぬ猛将だ。できるなら晋、涼ともに避けるべき相手といえる。」

「西夏は厳しい砂漠の気候で荒涼の地だ。涼への襲撃は食糧危機が最大の要因。西夏の食糧難を克服する手立てはないか。」

「西夏は水不足によって作物が育ちにくく馬や牛が餓死。さらに戦を好む西夏王によって兵糧にも悩まされ

る。」

「皇子の嘉慶は戦だけでなく治政にも優れていると聞くが。」

「はい。最強で最大の軍を統制する力は秋虎様も認めるほどです。そして山、砂漠の民に信頼されています。」

「あの荒くれ者が集まる精鋭隊をまとめるとは凄腕だ。」

「真月は水脈を操れるな。」

「はい。」

「山の国は水不足が課題。上流の水を貯水し、麓の牧草地に行き渡らせれば、草や作物が育ち家畜が飢えることもない。涼の草原にとっても上流からの清水を荒廃地にも供給できる。相互両得だ。」

「国境はどうなるのですか。」

「涼は山からの清水を、西夏は山の麓を牧草地として分け合えばいいのだ。互いの利を活かし、涼と西夏は交易すればいい。」

「長い間睨みあってきた国と交易できるとは到底信じられない。」

「そこは文武に優れた将の話し合いだ。幸い、涼の秋虎、西夏の嘉慶、晋の衛星は稀代の将軍、戦馬鹿ではない。但し衛星、秋虎は、政から一線を画し皇宮を避けている。嘉慶は皇族だが西夏王は武力で他国を制したい。交易は時期尚早だが、水源の確保は何とかできるだろう。十分な話し合いが必要だが。」

「西夏に話を持っていけるかどうか。」

「わたしが西夏の嘉慶に話してみる。わたしは彼の命の恩人だから。」

「衛星様には。」

「言わない方がいい。伝令は泉兎を使う。嘉慶はすぐにわかるはずだ。それより早急に水車の絵図が欲しい。それと貯水法も。山からの清水が流れる川に水車を設けて、水流を万遍無く麓の荒地に流し入れたい。」

「はい。」

「現地視察を兼ねて久しぶりに馬駆けと行くか。」

「はい。月牙と真泉が喜ぶますね。準備ができましたら陽兎によって報せます。」

「秋虎殿は真月殿を娶るのか。」

「はい、そのつもりです。わたしは砂漠で先を見失ったとき、真月に命を助けられました。しばらくして涼を訪ねてきたときに、妻にすると心に決めました。」

「美しい細君だな。わたしも翠月に命を助けられた。まさに砂漠の天女だ。」

「秋虎様といい衛星様といい、大將軍の細君は常人とはかけ離れた美しさだ。それに騎乗しながらの武術は素晴らしく、まるで軍神。衛星様は片時も翠月様を離さないご寵愛ぶりだ。」

「秋虎様は命の恩人である真月様に一目惚れ。將軍府を訪ねてきたときにもう離さないと誓ったらしい。涼に戻ったら婚礼だ。」

鎮北王府から涼に戻った真月は、ハヤブサの陽兎に文を預ける。

「翠月様。西涼の山の麓に参りましょう。明後日お待ちしております。陽兎が先導します。」

(真月 筆)」

陽兎から文が届けられた翠月は衛星のもとへ。

「衛星様、早朝、涼の真月と落ち合い、村に行つてまいります。」

「巫族の長によろしくとお伝えしてくれ。土産を忘れずに。伴はいいのか。」

「はい。砂漠ですから。」

翠月は鷹の泉兎に嘉慶宛の文を渡す。

「西夏の嘉慶にお願い。」

泉兎は砂漠に向かって飛び立った。

西夏の山間、嘉慶の頭上に大きな鷹が旋回している。あれは翠月殿の鷹では・・・。

空を見上げた嘉慶の前に砂煙をあげて降りてきた。

「確かに文を預かった。いま返事を書くから待っていてくれ。」

泉兎は西夏の正門の屋根で羽を休めている。門衛は猛禽の鷹から遠ざかる。

「天女翠月と真月から折り入って話があります。陽華泉でお待ちしています。伴は狼貴、狼華です。ハヤブサが舞っている下でお待ちしています。どうか内密にお願いします。」

翠月 筆

「承知しました。わたし一人で向かいます。陽華泉にてお会いしましょう。」

嘉慶 筆

翠月殿に会える。涼の女軍師と一緒とはどういった話か気になる。

「秋虎様、翠月様と陽華泉に行つてきます。」

「婚礼の準備はいいのか。」

「もう・・・ですか。巫族の村に報せます。」

「それがいいだろう。土産を忘れずに。伴はいいのか。」

「はい。砂漠ですから。」

翠月と真月は月牙と真泉に跨り、上空には泉兎、月兎、陽兎。そして狼貴、狼華を連れて陽華泉に。

真月が砂漠の中央に立つと、濃霧がはれて陽華泉と草原が開けた。

嘉慶は上空に舞うハヤブサを目印に、広がる陽華泉に辿り着いた。

「翠月殿、お久しぶりです。先日は意外な場所でお会いしました。」

「西夏は他国の領地を略奪しているのですね。食糧難は天候に左右され、戦では解決しません。自給自足を試みなければ。」

「西夏は貧困な土壌で枯地がほとんど、作物も牧草も育たないのです。」

「山からの水流を西夏の荒地に流し込めばいい、水の流れを変えるのです。そして水不足に備え貯水すれば解決します。」

「できますか。」

「できます。水流を操るのです。まずは村で食事をしながら話しましょう。」

巫族に昔から伝わる桃花酒、豊かな土地が育んだ野菜、清流から捕れる魚が並ぶ。

「水流を確保すれば牧草も育ち作物も収穫できます。西夏の民に木板を組んで水車を作らせます。水流を西夏に行き渡らせるように涼の領地に一基。そして荒地まで流れるように西夏側に一基作ります。」

「どうやって水流を意のままにし、水車を作るのか。」

「わたしたちは天象を読み水流を操る天女です。涼は真月が、西夏はわたしが指示しますので殿下は人工を用意してください。ここにある梅の苗木を植えます。梅酒を作り西夏の銘品に育て他国に売ります。民が豊かになれば戦も必要ないでしょう。略奪では大義名分が立ちません。嘉慶王子は治政にも優れたお方、いかがですか。」

「このままでは西夏の孤立は必須。燕、北臨はいつ裏切るかわからず更なる交易に期待できない。物価は高騰するばかりです。」

「その通りです。但し各国君主に話を通すとなると一向に進まないの、わたしたち3人で始めましょう。兵は使わず民の力を活かすのです。」

「水車など作ったことがない。」

「山の民は木の伐採が得意でしょう。大丈夫ですよ。絵図は水を操る真月が描きます。まずは水流から。成果が出れば西の関門は速やかに涼国にお返しください。」

「約束します。この桃花酒は最高に美味しい。」

「西夏は寒いので梅酒を作りましょう。」

「翠月殿は晋にいるのですか。」

「はい。晋の衛星大將軍と縁があって。真月は涼の秋虎大將軍との縁です。」

「両国とも天女を手に入れたのですね。わたしは一步遅かったようです。」

「こればかりは縁ですから。嘉慶様とはこれから縁ができるかもしれません。」

天女は軍神との子を産み、血を継いでいくという。一人の軍神と添い遂げることはなく、秀でた軍神と縁があれば結ばれる。そして子を成し、巫族の血をつなげていく言い伝えがある。真実だろうか。

翌朝それぞれ陽華泉を立った。現地視察によって真月が水車の絵図を描き、涼の民と共に組立に入る。

翠月は早速涼に入った。山間から浸み込んだ水が流れ、下流に入る。麓に水車を組み、水流を西夏の方向に流す。すると今まで干からびていた河川に魚とともに水が流れ込んだ。すぐに牧草が茂るだろう。

翠月は、西夏の嘉慶に文を書く。

「涼から西夏の干からびた河川に水が流れ込んだのは真月の水車です。さらに水流を作るために西夏に向かいます。人工と宿営をお願いします。真月も入ります。」

翠月 筆」

嘉慶は早速山の麓に宿営の準備だ。西夏の民 200 名と開墾を目的とした設営だ。

「翠月が部屋にいない。どこに出かけたか。」

「旦那様、奥方様から文を預かりました。」

「衛星様。しばらくの間、巫族の村に行くことをお許しください。真月も一緒です。玉謹をよろしく願います。

翠月 筆」

いつまで留守にするのか、本当に戻ってくるのか。婚礼を控えた真月殿も一緒なら、しばらく待っていることにしよう。常人ではないのだから仕方ない。それに数月警護で皇宮に滞在する。衛星は不安ながらしばらく待つことにする。

「父上、母上はどこにいますか。」

「母上は砂漠に用事ができたようだ。すぐに戻ってくるだろう。わたしもしばらくは警護で陛下の元だ。」

「水心に文をお願いしたいのに・・・。」

「文は泉児に頼んだらいい。すぐに母上と戻ってくるから。」

「はい。父上も気を付けて。」

西夏の宿営に翠月が入った。民は神獣に驚いたが、天女様と聞き納得。

「民には食糧危機から助けてくれる天女様だと伝えました。」

「なるほど、そうでしたか。」

「翠月殿の幕舎の隣に真月殿の幕舎を設営しました。沐浴もできます。侍女になんでも申し付けてください。」

「ありがとうございます。」

「殿下、もう一人の天女様が来ました。」

「真月殿、感謝します。幕舎はこちらです。」

「涼の河川から水車によってそちらに水が順調に流れているようです。」

「はい。枯れた河川にきれいな水が流れ込んでいます。」

「ここにもう一基水車を設置して、さらに水を広範囲に流します。」

「わたしは、土地を耕し牧草地を作り、作物を育てる方法を民に教えます。早速始めましょう。」

「こちらが水の流れを作り、豊饒な土地から作物や牧草を生み育ててくれる天女様だ。西夏を食糧危機から救ってくれる。」

真月は伐採した木を寸法通りに組立てるように指示をする。西夏の民は次々に組立てる。

翠月の指示で、土地を耕し、巫族の村の苗を植えて種を蒔く。

幾日か経つと、水を求めて鳥や動物が集まり、耕した土から緑が芽吹いてきた。

水車ができると、さらに水流が勢いを増して、枯れた河川に流れ込んでいった。魚も泳いでいる。

大きい穴を掘り、水を貯められるように池を作る。山からの水は冷たくて美味しい。

「殿下、天女様は凄い。あっという間に作物が育ち、川で漁もできる。言われた通りに木板を組むと、川の水が命じられたように流れていきます。水撒きの手間がなく作物が育つのです。荒地の西夏を救ってくれる。」

「殿下、梅の苗を植えたらあっという間に大きくなっています。美しい梅林ができて、実がなれば梅酒になるそうです。」

「すぐに牧羊地になれば、家畜が餓死することもない。お二人は天から降りてきた天女様です。」

「殿下がどちらかの天女様と一緒になれば、さらに西夏は豊かになります。」

「戦に招集されずに作物を育てられる。」

西夏の民は、毎日のように感謝の意を嘉慶に伝える。嘉慶は水車を組立て、農作業で民とともにいい汗を流す毎日に満足していた。これぞ明君による治政だ。

民と食事をし、酒を酌み交わす。天女の隣は取り合いだ。同じ目線で交わす民との会話は何にも代え難い経験だった。

「翠月殿、この宿営生活は素晴らしい経験だ。兵であれば敵を倒す軍略の話ばかりだが、この宿営には国を豊かにする知恵に溢れている。この度の宿営に感謝する。」

「それは何よりです。他国の領地を奪うのではなく自国で賄うのが良策です。」

「ところで鎮北王には何と行ってきたのだ。」

「真月と巫族の村に行ってきますと文を残しました。」

「わたしとの宿営と知ったら、晋、涼に攻め込まれるな。」

「どうでしょう。」

「ともに天女を手放すことはないだろう。わたしだったら必ず添い遂げる。」

翠月の予知では、西夏は嘉慶によって生き残る。内紛を切り抜け山と砂漠を治めるのは嘉慶だ。燕王はずる賢いが徐々に晋に攻め込まれ、最終的に玉謹が母の仇で制圧する。北臨はどう動くのか。山の西夏、草原の涼、そして晋の3国時代が見えるが、砂漠の北臨は未知数だ。

宿営はそのまま村として残すことに。翠月、真月はそれぞれ西夏を離れる。

「翠月殿、また会えますか。」

「縁があればまた会えるでしょう。文は泉児がいますので。」

「嘉慶様、必ず西関門は涼国に返してください。」

「約束する。」

「旦那様、奥方様が戻りました。」

「翠月か。」

衛星は屋敷を飛び出した。

「衛星様、桃花酒を手土産にただいま戻りました。」

「心配かけるな。無事で何より。」

「心強い護衛がいますから。」

侍従に馬の世話と狼の餌を頼み、侍女に沐浴の準備を指示する。

「衛星様、あとでお部屋に参ります。」

「待っているぞ。」

沐浴している翠月のもとに玉謹が。

「母上、お帰りなさい。おじい様はお元気でしたか。」

「ただいま。族長が玉謹に会いたいと言ってましたよ。わたしも玉謹に会いたかった。」

「明日、射的を見てください。」

「わかりました。」

衛星は膳を自室に運ばせ、桃花酒で翠月と一献だ。そして侍従に人払いを命じた。

涼の將軍府では婚礼の準備が着々と進んでいた。

「大將軍、真月様が戻りました。」

「やっとか。」

秋虎は部屋を飛び出した。

「秋虎様、ただいま戻りました。屋敷が華やかですが何かあるのですか。」

「真月殿とわたしの婚礼だ。」

「いつですか。」

「数日後に將軍府で行う。真月殿はわたしの妻だ。」

「はい。」

「陛下、天女の助けで、涼から水源を確保し、食糧危機から民を救います。よって西の関門、領地を涼に返還するつもりです。」

「領地を返すだと。何を考えているのか。」

「父上はまだ戦によって略奪を繰り返すのですか？大義名分のない戦は一国の王がすることではありません、卑怯です。それより水源を活かし、民と共に領地を豊かにすることです。」

「陛下、嘉慶王子の言う通りです。略奪をしても食糧危機からは脱しません。戦をせずに自国を豊かにしましょう。」

「領地を返還し、涼と停戦の合意をしては。」

「確かに兵糧も限界だ。嘉慶、涼と停戦をし、和睦するか。」

「はい、今なら同等の条件で和睦が可能です。まずは涼の秋虎大將軍と話し合ってみます。」

「涼と晋に天女が舞い降りたのか。西夏は見放されているのだな。」

「一步遅かったのかもしれませんが、わたしは諦めません。」

「妃は娶らぬのか。」

「はい、天女は他の女子を許しませんから。」

## 翠月と西夏の嘉慶

「陛下、西夏王から停戦の合議が出ていますがいかがしますか。使者として嘉慶王子が西関門にて秋虎大將軍と話し合いたいとのこと。涼王、西夏王がそれぞれ出向くとなると大事になります。ここは互いに兵権を握る大將軍と王子に一任してはどうでしょうか。手強い西夏との和睦は絶好の機会です。西関門の返還もいままです。これ以上こじれないように、ここは相互同等の条件でまとまるのが良策です。」

「秋虎、どう思う。」

「宰相の言う通りです。嘉慶王子とは何度も剣を交えた好敵手。治政に優れ民に絶大の人気があります。信じていいでしょう。」

「では、秋虎を使者に遣わす。」

「はい。」

「ところで真月殿と民が麓に設営した水車によって枯地が潤い豊作と聞いた。山からの水流が意のままに草原を潤すとか。どんな仕掛けなのか。」

「水流を予測し、氾濫しないように向きを変えながら木を組立ます。いまは民が管理して、村も繁栄し、そろそろ梅の実が収穫できます。渴いた地から村人が集まり集落を形成しています。真月は村長様と民に人気です。」

「天女の村長か・・・。」

「涼からの水流が西夏の荒地を潤し、牧草が茂り家畜が飢えることもありません。もう涼の地を奪う必要はないのです。これは晋の鎮北王妃による策です。西夏では翠月殿、真月は天女と敬われているとか。さらに西夏に水車を造り、土地を耕し集落ができています。まさに理想の治政です。」

「3国の益が叶う交易ができればいいな。」

「はい。停戦すれば民や物が動き交易が盛んになるでしょう。」

「鎮北王妃か・・・噂では真月を超える女傑と聞く。会ってみたい。」

「涼の秋虎大將軍、西夏の嘉慶王子によって停戦が決議された。西の関門は涼に返還される。涼と西夏に設営された水車と民のおかげらしい。」

「それは素晴らしいことです。」

「水車の設営は天女によるものと聞いたが。」

「・・・・・・・・」

「涼と晋の天女と聞いたが、西夏に行ったのか。」

「真月の伴としてです。」

「夫婦で隠し事はやめないか。」

「停戦となり、民の生活が戦で脅かされないのが何よりですから。」

まさか翠月が西夏の嘉慶王子と何かあるとは思えない。考え過ぎだ。そろそろ翠月に子ができるといいのだが・・・。

涼の將軍府では盛大な婚礼が行われた。稀代の軍神と天女の婚礼は誰もが祝福する。鎮北王妃によって花嫁道具は揃えられ、美しい衣装が贈られた。

深紅に金の刺繍が施され、贅を尽くした白い玉の装飾品が、真月の美しさをさらに際立たせる。

寝所で待つ真月の前に、秋虎は駆け寄る。

「美しい。本当に幸せだ。生涯真月だけを愛するここに誓う。」

「約束してください。」

秋虎は真月と向き合い、深紅の面紗を取る。真月の顔を引き寄せ唇を重ねた。甘い香りが鼻腔を抜ける。秋虎は真月を寝かせ、自分をゆっくり重ねた。

涼の軍神は天女を妻にした。

晋は織物の交易が盛んだ。西夏は翠月の梅林のおかげで梅酒が銘品となる。涼は窯業、鍛冶。3国共に田畑が改良され、農作物、薬草、米、麦の収穫で食糧危機もなくなった。

停戦のおかげで3国の民は自由に往来し、交易によって民の生活は潤うことに。

そして鎮北王妃翠月と大將軍の細君真月は天女と民に敬われ、各国君主は明君として三国の民から称えられた。

「侍医を呼べ。翠月が悪い病にかかった。」

衛星の命で侍医が翠月の寝所へ。

「数日、食も喉を通らず食べても吐いてしまうありさま。身体も熱い・・・。」

侍医はぐったりした翠月の脈を採る。

「大將軍、ご懐妊です。おめでとうございます。2月ほどかと。どうか安静に養生してください。」

「ほんとか。わたしは父になるのか。翠月ありがとう。玉謹に弟か妹ができるのだな。」

「父上、母上は赤ちゃんができたのですね。」

鎮北王府は吉事に、軍を挙げて祝宴だ。

翠月と夫婦になって3年程。衛星が心待ちにしていた懐妊だった。毎晩翠月と共寝をし、衛星は翠月に夢中だった。そろそろ懐妊の頃合いかと思っていたので本当にうれしかった。

鎮北王妃懐妊は皇宮にも届く。

「陛下、鎮北王妃が懐妊です。」

「すぐに衛星をここへ。」

「陛下、王妃が懐妊しました。」

「玉謹はいくつになる。」

「6歳を過ぎました。弟か妹ができると喜んでいます。」

「衛星、いま後宮では皇太子の地位を狙って各派閥の醜い争いが繰り広げられている。皇子は3人とも重責を担う器ではなく、後見人としての座を争う動きが過激になってくる。そこで陽蓬の息子である玉謹を皇太子に考えている。衛星のもとで権力争いの犠牲にもならず、各国から集められている妃が母でもない。勝手に潰しあう派閥闘争はしばらく静観としよう。この機会に後宮と官僚の癒着と謀略がわかるというもの。玉謹の素性が知られたら命に危険が及ぶ。翠月殿との子は鎮北王としてやがては玉謹を助けて欲しい。いかがかな。」

「はい。玉謹様は晋の陽蓬妃様のお子で、陛下の甥にあたります。やがて陛下の側近として晋を支える器量は十分です。成長を見ながらゆっくりにお考え下さい。わたしの子は晋に誠心誠意仕えます。」

「それを聞いて安心した。このことは内密に頼むぞ。」

「はい、承知しました。」

衛星と天女に男子が誕生すれば、素晴らしい軍神になる。女子なら翠月同様天女だ。将来、玉謹が皇帝、鎮北王が皇宮を抑えて、最高の側近となるだろう。ただし二人の子が多くなると厄介だ。男子は一人で十分だ。早々に側室として公主を鎮北王に嫁がせるのはどうか……。衛星が首を縦に振らないだろう。天女の子は玉謹を脅かす存在になるのではないか……。

晋王が天女を牽制し、公主を鎮北王に嫁がせる。あるいはここ数年でわたしの命を狙うだろう。お腹の子は女兒だ。命の危険があれば鎮北王府より離れよう。衛星を苦しめることになるが、相手が君主晋王であればどうにもならない。翠月の予知は絶対だ。

「衛星様、村から出産にあたって乳母と侍女を呼び寄せますがいいでしょうか。」

「好きなようにしなさい。」

「やはり出産となると、昔から信頼のおけるものを傍に置きたいので。」

翠月は月牙泉から武術と騎馬に秀でた香月、草月、乳母を呼んだ。

「翠月様、懐妊おめでとうございます。一生懸命お世話させていただきます。」

「ここには長く留まれないようだ。その時は子を連れて、共にここを出るぞ。」

「はい。」

翠月は3日3晩苦しみながら女兒を出産。天女は難産という言い伝えは本当らしい。

「旦那様、世にも美しい公女様です。」

「翠月は大丈夫か。」

「はい。意識が混濁していますが、命に別状はありません。」

衛星は翠月を抱きしめる。

「ありがとう。翠月。」

「はい……。女兒で何よりです。男児であれば危険ですから。」

「え……。名は翠星にしよう。」

「はい。よい名です。」

男児であれば危険とはどういう意味か。翠月は予知力のある天女だ。何かが起きるのか、不吉な予感がする。

「父上、妹ができてうれしいです。」

「翠星と名付けた。可愛がるのだぞ。」

「はい。」

皇宮には衛星と釣り合う公主、皇女がいない。やはり天女と女兒を早急に始末したい。鎮北王と玉謹がいればいいのだ。やがて衛星に公主を嫁がせれば、鎮北王の跡継ぎも生まれるだろう。武神と天女の男児は危険だ。

自分の血を繋げていきたいのが国王。晋王は妹の陽蓬妃を見殺しにしたも同然。衛星と玉謹は手放さないだ

ろう。天女である翠星は玉謹を超える器量だ。命を狙われるのは確実。策を練らなければ、やがて晋から天女が去ることになる。

「香月、草月。衛星様と玉謹が陛下のお伴で、遠征に出向くのを狙って鎮北王府は急襲される。狙いはわたしと翠星。陛下の命で鎮北王府の警備を手薄にすると考えられる。そこで狼貴、狼華、泉児と兵を始末して消える。襲撃する皇宮の兵は衛星軍に比べたら飾り物程度、目立たないように 100 人程だろう。白起將軍と精鋭兵を護衛に、敵兵全員皆殺し、そして翠星を連れて消える。天女の命を狙う輩は許さない。」

「なんとずる賢い晋王。翠月様、わたしたちはどこへ向かうのですか。月牙泉に戻るのですか。」

「西夏に向かうつもりだ。山の国なら姿を晒すこともないし、わたしは嘉慶王子の恩人だから。」

玉謹 8 歳、翠星は 2 歳になった。いつの間にかしっかりと歩き、言葉を覚えた。木剣を振り回し、兄に並んで武術の型を習う姿は、屋敷中を笑顔にし、衛星を喜ばす毎日だった。

「衛星様、翠星様は翠月様を超える武人になるでしょう。楽しみです。」

「翠月、翠星は成長が速すぎる。体軀もしっかりしている。」

「はい。武術の稽古が楽しいですよ。白起殿から離れません。父上が憧れの武人とか。素晴らしいことです。」

「なんともうれしいことだ。翠月に似て容姿も美しい。自慢の娘を生んでくれてありがとう。幸せだ。」

「翠月、陛下のお伴で屋敷を当分留守にする。警護の兵は白起に相談するように。」

翠月の部屋から公務に向かう衛星を見送る。衛星は毎晩翠月と共寝をする。身も心も翠月に夢中なのだ。翠月が消えることになれば晋王への恨みも相当だろう。

「出発の準備をしておきます。」

「夕餉には戻る。」

「白起將軍、お話があります。」

「はい。翠月様、なんなりと。」

「衛星様と玉謹が陛下の伴で留守の間に、わたしと翠星の命を狙われます。」

「だれが・・・」

「陛下です。」

「そんな馬鹿な・・・」

「白起殿、わたしに予知力があるのはご存じですね。」

「はい、天女様ですから。」

「皇宮の兵 100 名程度。そしてここの護衛は皇宮から警備強化の名目で手薄になります。そこを狙うでしょう。」

「皇宮の兵は軟弱です。」

「はい。そこで 50 名ほどの精鋭兵を配置願います。皇宮からの兵を全員始末してからわたしは翠星と消えます。陛下の狙いはわたしと翠星です。もうここにはいられません。狼貴、狼華、泉児がいれば瞬時に始末できます。それに香月、草月も相当の手練れです。ご安心を。」

「それはもう。衛星様にはなんと・・・。」

「鎮北王は知らないほうがいいでしょう。鎮北王府の護衛が侵入者を始末したということに。狙いであるわたしが消えれば陛下は満足します。」

「それでは衛星様に何と云えばいいか・・・。」

「命を狙われ逃げたということに。衛星様は陛下だとすぐにわかるでしょう。わたしから文を残します。」

「もうこちらには戻らないのですか。」

「はい。君主を狙われたのですから、鎮北王妃でいられません。白起將軍には大変お世話になりました。どうか最後はよろしく願います。」

「はい。」

「衛星様、晋王によってわたしと翠星は命を狙われます。軍神と天女の子孫は危険と判断したのでしょう。やがて皇宮から女子を嫁がせ鎮北王の後継者を作ればいいという、愚かな君主の考えです。砂漠で出会い、晋での数年間は本当に幸せでした。玉謹はやがて鎮北王から晋王になり、母上の敵討ちに燕を滅ぼすでしょう。決して涼と西夏とは争わないように。翠星は立派に育てます。どうかお幸せに。そして翠月をお忘れください。翠月 筆」

翠月は泉児に文を嘉慶王子に届けるように命令した。

「嘉慶王子、どうか助けてください。晋王に命を狙われ、晋から消えます。西夏に娘、侍女ともにしばらく逗留させてください。必ず恩返しさせていただきます。返信は泉児の足環に。」

翠月 筆」

西夏の宮殿から見上げる空に鷹が舞っている。

「あれは翠月殿の泉児だ。」

泉児は嘉慶めがけ舞い降りた。嘉慶は足環から文ははずした。

「承知しました。決行の日、泉児を飛ばしてください。涼との国境でお待ちしています。刺客が潜んでいるかもしれません。真月殿に報せるように。お気をつけて。」

嘉慶 筆」

「真月、わたしは晋王に命を狙われ、衛星の留守中に急襲される。もちろん刺客は皆殺し、そして消える。秘密裏に西夏に入る。涼との国境に嘉慶が出迎えると返事が来た。真月も国境に来て欲しい。どうか秋虎殿に内密に。」

翠月 筆」

「いまから鎮北王府に向かいます。刺客を始末して共に涼に入り、西夏まで無事にお届けします。幼子を連れての逃避です。お力になります。」

真月 筆」

準備は整った。衛星の出立は三日後だ。

「翠月、3日後の早朝に出立する。皇宮の警護と訓練に屋敷の兵は少ないが、精鋭を選抜したから安心するよ  
うに。翠月はもちろん、侍女の2人も相当の手練れと見る。それに神獣もいれば晋の3軍並みだな。」

「はい。衛星様の留守に真月を呼びました。翠星の顔が見たいということです。」

「それはちょうどいい。ゆっくりするといい。涼への土産を用意しよう。」

夜、翠月は衛星の部屋へ。

「翠月か。もう少しで終わるから先に休んでくれ。すぐに行くから。」

翠月は、衛星の傍らに立ち、いきなり衛星に口づけをする。そして驚く衛星の膝に跨った。それは激しい接吻、  
衛星は息ができないほどだ。やがて唇が溶け合うような快感に襲われた。翠月と衛星は互いの衣を脱がしてい  
く。唇は離さない。二人の激しい息遣いが部屋に漏れる。

「衛星様、物音がしましたが。」

扉を開けた白起は、座る衛星に跨り激しい口づけをする翠月の視線に思わず目を伏せる。

「失礼しました。」

白起はあんなに激しい行為を想像すらしたことはなかった。そしてこちらに目配せをした翠月の妖艶な眼差し  
が目に焼き付いた。

衛星は翠月を抱き上げ、寝台に寝かせ自分を重ねる。受身な常人の女子と違い、天女は魅力的だ。衛星の身  
体に唇を這わせ、指でなぞる。お互いの身体を余すことなく堪能する。天女を抱いたらもう虜だ。誰にも触れ  
させない。翠月は仰向けの衛星に跨り、潤う芯を静かに沈めていく。衛星は翠月の腰を掴み、上下に振らし突  
き上げる。翠月の官能的な声と共に絶頂を迎える。

翠月はどこまでも妖艶で美しい。

「どうしたのだ。今日はいつになく激しい翠月をみたぞ。」

「しばらくお留守で寂しいです。森の精に惑わされないように。」

「動物と兵だらけだ。翠月ほど愛おしい存在はこの世にいない。」

衛星はまだ力が漲る身体で翠月を抱く。翠月もそれに応える。夜は長い。

出発の早朝、侍従が白起の元へ。

「白起将軍、旦那様が翠月様の寝所にいらっしやいません。」

昨晚も衛星様の執務室か。

「わかった。」

白起は執務室に向かう。

「衛星様、そろそろ支度の時間です。」

「白起か。香月に手伝うようにこちらへ。そして草月には翠月の衣の用意を。」

「はい。」

香月と草月は、半裸の衛星と翠月の支度を素早く手伝う。

「衛星様、どうかお気を付けて。玉謹は父上の言うことをきちんと聞くのですよ。」

翠月は玉謹を力の限り抱きしめる。

「はい。母上。翠星と待っていてください。」

「翠月、行ってくる。白起、留守を頼むぞ。まさか鎮北王府を襲う輩がいるとは思えぬが、いつもより少数なので気を抜くな。香月、草月頼んだぞ。」

「はい。お任せください。神獣と猛禽の護衛がいます。」

「そうだな。兵より頼もしい。」

衛星は翠月を抱き寄せ口づけをする。翠月も衛星に身を任せる。侍従や兵は一斉に俯く。

「では、行ってくる。」

「翠月様、まさに理想のご夫婦ですね。こちらが照れてしまいます。」

「お肌は輝くよう。昨夜も素晴らしい夜だったのでしょう。今朝はお二人ともに半裸でしたから。」

「そうね。全身全霊愛し合えて、本当に幸せだった。さあ切り替えましょう。」

「はい。」

もう愛する二人に会うことはないだろう。

翠月は衛星と玉謹が視界から消えるまで見送った。

翠月の姿を白起は見つめる。最初に砂漠で出会った時から白起の憧れだった。衛星と結ばれても見ていだけで十分幸せ。鎮北王府付を希望し、翠月と武芸や馬術の鍛錬をし、馬を駆る。一緒にいられるだけで心は満たされた。その翠月が晋を去る。晋王の急襲から必ず守り抜く、白起は翠月を想うつらい気持ちに蓋をした。

入れ替わるように真月が鎮北王府に到着。

「翠月様、涼の真月様がただいま到着しました。」

翠月は門へ向かう。

「真月、よく来てくれた。」

翠星が遅れて草月に連れられ駆け寄る。

「翠星です。真月様、お初にお目にかかります。」

「立派なご挨拶ですね。お顔は翠月様にそっくり、恵まれた体軀は父上譲りですね。それにしても年齢を超えた成長ぶりですね。」

「白起殿仕込みの武芸者よ。」

「真月様、あとで翠星のお相手願います。」

真月と白起将軍は翠月の部屋へ。

「7日後の夜半に襲ってくる。こちらの精鋭兵は白起将軍の配下 50 名、狼貴、狼華、泉児、手練れの香月、草月で十分だ。陽児と月児が敵の状況をいち早く報せるだろう。多くても 100 名程度、問題はない。夜半で弓矢を扱える兵はいない。久しぶりに暴れるつもりだ。翠星は草月が背負って先に脱出する。月児に涼まで先導させて欲しい。追手がいれば狼華を付ける。合図は泉児の鳴き声だ。」

「はい。白起殿よろしく願います。」

「真月殿、涼との国境では必ず秋虎大将軍に報せが入ります。」

「そこはお任せください。鎮北王、晋に翠月様の行方が知られないようにします。」

鎮北王府は平穏だった。白起は翠星に武術を教え、翠月がそれを眺める。最後の数日間は翠月を独占した気分だった。

「白起殿、いよいよ今晚でしょう。真月の報せでは100名程が黒装束で武器を携え準備しているとか。軟弱とはいえ100名です。一気に片付けましょう。」

「門前で精鋭兵が半数を始末して、邸内はわたしたちで十分でしょう。草月はすぐに翠星を背負って涼との国境へ。」

2日前。真月は刺客が気になる。晋王の策略であれば刺客を放つことも。晋の領内で鎮北王の兵を護衛には使えない……。

「白起殿、晋から涼の国境までが危険です。刺客がいれば草月と翠星様が……。いくら手練れの草月でも多数の刺客相手では無事でいられません。やはりここは秋虎に相談すべきかと。秋虎の精鋭20騎もいれば、必ず晋から涼まで送り届けます。涼で休養が必要かもしれません。翠星様はまだ幼児です。」

「衛星様に知られたら。」

「秋虎は信用できます。わたしは妻である前に命の恩人ですから。」

「わかりました。秋虎様、翠月様の方はよろしくお願いします。」

上空から陽兎が將軍府に舞い降りる。

「秋虎様、陽兎です。」

秋虎は陽兎の足環を外した。

「真月だな。」

「秋虎様、鎮北王府が晋王の兵によって急襲されます。天女と王女の存在を、鎮北王不在のいま抹殺するので。わたしは翠月様と晋から涼に入り、西夏との国境まで護衛します。晋王による刺客が気になります。どうかお守りください。鎮北王府の兵は立場上使用できません。密かに晋に入り侍女と翠星様の護衛を。月兎が報せませす。そして涼国内の安全をお願いします。翠月様は翠星様と晋より消えます。鎮北王にはどうか内密に。秋虎様を心より信頼します。」

真月 筆」

晋王はなんて愚かなのだ。天女と天女の子を手放せばこれからの繁栄は望めない。また戦の世になる。

「真月、よくわかった。晋に10名の精鋭を配置し、侍女と王女を追手から守り、涼に入ればわたしと將軍府の兵が護衛する。真月はともかく涼までは無事でいてくれ。」

国境で待つ。

秋虎 筆」

「陽西、精鋭を20名選べ。変装して晋に10名潜入させる。鎮北王府から脱出する侍女を刺客から守れ。陽兎が目印だ。そして10名は晋との国境にわたしと行く。鎮北王妃と王女を無事に軍営まで護衛するのだ。王

女はまだ幼児、数日の休養が必要だろう。多勢の兵と戦い涼に入る人馬も相当の疲労だ。軍営は国境から少し離れた草原に設営を。軍医と侍女、乳母を待機させろ。」

「はい。晋から鎮北王妃が……。誰が命を狙うのですか。」

「晋の愚帝だ。晋王が天女を暗殺するのだ。」

「恐ろしいことを。かしこまりました、すぐに準備します。」

「涼兵と気づかれぬように。」

## 天女翠月 西夏へ

「さすがに 100 名いれば手薄の鎮北王府を襲うのはわけない。」

「はい。いくら精鋭揃いとはいえ、ここ数日は侍従がほとんど。いくら鎮北王府でも抵抗できないでしょう。」

「狙いは王妃と王女だ。必ず仕留めろ。」

洛総は晋王の密命で 100 名の兵を牽き鎮北王府を急襲する。刺客も 30 名放つ。衛星に嫉妬する洛総は意気が上がる。

洛総は、狼貴、狼華、泉児の存在を知らない。そして白起が鎮北王府にいることも、すでに予知されていることもだ。百戦錬磨を相手に晋王ともども考えが浅く愚かだ。

静まりかえった鎮北王府。洛総の兵が取り囲む。暗闇にまみれ声を出す間もなく襲われる。衛星軍の兵だ。半数以上が襲われたのに気づかず、洛総は正面を突破する。いきなり黒い塊が襲い掛かり、次々と兵を咬み殺す。

藍色の衣を纏い翠月が兵を斬り捨てる。背後から深紅の衣が兵を刺し殺す。白起と精鋭兵が洛総の兵を取り囲む。20 名程を残し、あとは血溜りに死体の山だ。

「誰が狙いか。まさか王妃の命を狙ってここから出られると思っているのか。」

「白起、なぜここに。」

「わたしは王妃の護衛だ。」

「洛総とやら、わたしの命はお前に奪うことはできない。ここで皆殺しだ。」

翠月は洛総の首に剣を突き刺し、瞬時に引く。洛総の首が胴体から離れて墮ちる。真月、白起が残りの兵を仕留めた。

「草月はすでに国境に向かっている。白起殿、このご恩は忘れません。それでは。」

「あとはお任せください。どうかご無事で。」

返り血を浴びた笑顔で白起に別れを告げる翠月は最高に美しかった。

草月は翠星を背負ってひたすら馬を駆る。たいした王女だ。こんな騒動の中ですやすや眠っている。

先方に人馬が……。刺客だ。わたしを狙っている。草月は両手に剣を携えた。

「いいか秋李、わたしを落とすなよ。翠星様を守るのだ。頼んだぞ。」

草月は駿馬秋李と刺客の中に飛び込んでいた。左右に分かれる刺客を刺殺する。落馬した刺客を追ってきた狼華が咬み殺す。それでもまだ数騎が追ってくる。さすがにわたしと狼華だけでは無理がある。そこへ左右から 10 騎が刺客に襲い掛かる。

「助かった。」

「草月殿、刺客は皆殺しに。秋虎大將軍の配下です。命により国境まで護衛させていただきます。今晚は涼の軍営でお休みください。真月様、王妃もすぐに追いつくでしょう。」

「ありがとうございます。命拾いしました。」

「けがは……。王女様はご無事ですか。」

「よく眠っています。けがは大したことありません。」

「それにしても素晴らしい騎乗の剣術と見上げた度胸。恐れ入りました。」  
草月は初めての恐怖と安堵感に目が潤んだ。

「翠月様、まずは涼で身体を休めましょう。翠星様はすでに涼に入り軍營でお待ちでしょう。」  
「涼を出発するときに嘉慶に報せる。」  
「はい。翠星様はまだ幼子。相当の負担です。軍医も乳母も待機しています。」  
「秋虎殿に報せたのか。」  
「はい。刺客を警戒して護衛を頼みました。」  
「お礼を言わねば。」

泉兎が鳴く、狼貴が唸りながら前を走る。  
「真月、香月、狼貴、刺客だ。」  
「はい。もうひと暴れですね。」  
「行くぞ。」  
刺客は20騎。晋王は狭量だな。この程度じゃわたしは殺せない。

秋虎の率いる兵が晋に入る。前方に黒装束を相手に紺碧と深紅の衣が舞う。  
真月と王妃、護衛だ。  
「急げ。加勢するぞ。」  
10騎が飛び出す。  
翠月と真月、香月は馬上から跳ね上がり、剣を振り下ろし次々と刺客を仕留める。まるで舞を見るようだ。神獣が馬から引きずり下ろし咬み殺す。  
「真月、涼へ向かえ。ここは任せろ。」  
「はい。お願いします。翠月様、香月、急ぎましょう。」  
「秋虎殿、ありがとうございます。お先に。」  
血を浴びた笑顔の天女は神々しいまでに輝いていた。

刺客をすべて始末して秋虎は涼の軍營に向かった。  
草月の傷は浅く、翠星は真月が用意した乳母から乳をもらっていた。  
「翠月様、翠星様はご無事です。道中ずっとお休みでした。」  
「馬に激しく揺られ、刺客との交戦でもか。」  
「はい。先ほど目を覚ましたので乳をあげました。食事より早く回復しますので。」  
「草月も大変だったな。ゆっくり休んで。翠星は乳母に任せたらいい。」  
「涼の秋虎様の兵に助けられ命拾いしました。刺客はなかなかの手練れ。危なかった。」  
「30騎の刺客。草月と狼華だけでは危険だったな。」  
「はい。」  
「真月、ケガは。無事で何より。」

「秋虎様のおかげで全員無事です。」

「それにしても素晴らしい剣術だと兵も舌を巻いていた。草月は一人で敵に向かっていったと聞いた。両手に剣、背中に王女、手放して馬に跨り刺客に突進したとか。さすがだ。」

「はい。男子でも草月の騎乗と剣術に敵いません。だから翠星様を任せたのです。」

「秋虎様、本当にありがとうございます。真月にも感謝しきれません。どうか衛星には内密に。すぐに晋王の急襲とわかります。白起將軍にはすべてを打ち明けて協力してもらいました。」

「これからどうするのですか。」

「西夏の嘉慶王子を頼ります。わたしは命の恩人ですから、しばらく逗留させてもらいます。」

「西夏なら晋の目も届かず、ゆっくり養生できるでしょう。数日王女の様子を見てから国境に送ります。」

「はい。涼を出る前日に、泉児から西夏へ文を送ります。」

それにしても王妃は真月を超える女傑だ。この大事に眉一つ動かさない。冷静だ。西夏の嘉慶は天女を手に入れるのか。そのまま王女を連れて巫族の村に戻るのか。衛星殿は晋王によって愛する天女を手放すとは。

翠月の一行は7日間秋虎の軍営に滞在した。翠星は秋虎軍でも陽西將軍に武術を習い、兵たちの人気者だ。「王女様は凄い武人になる。まだ幼児なのに木剣を振り回し、武術の型は完璧だ。そして何よりも王妃に似て美しい。」

「さっそく衣を作りましょう。涼の裁縫師は腕がいい。そろそろこちらに来る頃です。」

真月は翠星の衣を作らせた。桃色の生地をふんだんに使った羽衣のようなひだ美しい。動きやすく丈は短く、玉謹の衣とほぼ同型だ。

「なんて愛らしい。翠星様、秋虎にも見せてあげてください。」

「はい。まずは陽西將軍に。」

翠星が幕舎を出るといきなり嬌声があがった。あまりの愛らしさにみんなが驚いたようだ。

「ここ数カ月は、晋王の急襲に備え緊張の毎日だったが、この数日は穏やかで癒される。秋虎軍は素晴らしいな。まさか晋から追われるとは。予知力がなければ終わった命だ。」

「天女は軍神と子孫を残し、平安の世を創生するのが使命です。翠月様は天女、西夏の嘉慶王子とも子を成してください。嘉慶は優れた君主になります。そして翠月様によって西夏は益々繁栄します。それは涼にとっても益があります。今回で晋王に対しての信頼は揺らぐでしょう。西夏とは強固な関係が望ましい。願っています。」

「どうなるかな。嘉慶は將軍ではなくやがては西夏王。わたしと愛を育めるかどうか。それに衛星を慕う気持ちは消えない。西夏で落ち着いたら近況は泉児から報せる。」

「明日出立ですか。」

「今朝方、嘉慶に文を送った。明日国境で会えるだろう。」

「涼から近いので、また西夏の宿営でお会いしましょう。明日は秋虎と共に西夏との国境まで送ります。」

「いやだー陽西と別れたくない。秋虎の叔父上や真月様は。これからどこに行くの。玉謹はどこにいるの。父上や白起は。」

翠星が朝から大泣きだ。軍営中に響く。

「秋虎様も陽西殿も国境まで一緒です。いろいろ事情があるのです。きちんと教えるので泣くのはやめなさい。また会えます。」

「陽西、また武術を教えてくれる。」

「はい。すぐに会えますよ。」

陽西は翠星の泣き顔が切なかった。年頃になれば絶世の美女だろう。いつか会いたい。

翠月は狼貴、狼華を従え、香月、草月と。真月、秋虎、そして30騎の護衛。翠星は大好きな陽西に抱かれての騎乗にご満悦の様子。

やがて国境に到着。先方には嘉慶と西夏軍50騎が出迎える。

「翠月様。お迎えに上がりました。」

「嘉慶王子、無事にお連れしました。ここからはよろしくお願いします。」

「翠星様、ここでお別れです。母上のように立派な天女になってください。」

「陽西、また会えるよね。いつかお嫁さんにしてね、もう少しで3歳だから。」

翠星は目に涙を浮かべ必死に堪える。

陽西は翠星を抱き上げ、草月の元へ。

「秋虎様、真月、陽西殿、大変お世話になりました。命あるのは皆様のおかげです。このご恩は必ずお返しします。」

「翠月殿、西夏にお迎えします。行きましょう。」

翠月の一行と嘉慶が率いる西夏軍は山へと向かう。陽西は最後まで見送った。

## 西夏の天女

「王妃様、王女様と馬車に。馬はこちらで引きます。香月殿と草月殿はこちらの馬車に。相当疲れたでしょう。王子から騎乗せず休んでくださいとのことですよ。」

「ありがとうございます。」

山に囲まれた西夏の宮殿は、まるで絵巻の様だ。海中であれば竜宮城といえる絢爛豪華な佇まい。さすがの天女も驚きだ。

「母上、すごいお城です。ここはおとぎの国ですか。」

翠星は馬車から顔を出し、興味津々だ。

どんな軍師であっても西夏を攻めるのは無理だろう。この難攻不落な山の国を統べる嘉慶を見たい。確か翠月と同年だ。

「翠月殿、宮殿より眺望見事な離宮を用意しました。」

「あまりにも豪華な宮殿は気後れします。馬を駆り、花や木々が美しい離宮を望みます。それに狼貴、狼華がいますから。」

「それはよかった。気に入ると思います。裏山は狩りにもちょうどいい。」

宮殿の大門を通り過ぎ、草原が広がる山の麓に木々に囲まれた屋敷がある。かなり広大な鎮北王府の数倍はある敷地が広がる。

「ここはわたしの離宮です。侍女の部屋もあります。邸内の者になんでもお申し付けください。この者は侍従長の芳賀です。」

「よろしく願います。まずは腕利きの裁縫師と紺碧、桃色、草色、水色の生地を。衣を作りたいのです。」

「かしこまりました。すぐに涼からご用意します。沐浴の支度ができましたらお呼びします。お部屋はこちらです。」

翠月に用意された部屋は広く、隅々まで心遣いの感じられる趣味のいい装飾。翠月の衣同様の紺碧の色調に癒される。

「お気に召しましたか。」

「嘉慶王子。見事にわたしの趣向が反映しています。よくおわかりですね。」

「初めての出会いが強く印象に残っています。紺碧の美しい衣が風に舞っていました。」

「母上、わたしのお部屋は桃の花のようです。草月もすぐそばのお部屋です。」

「翠星、こちらが嘉慶王子です。わたしたちの恩人ですよ。お礼を言いなさい。」

「翠星です。3歳になります。命をお助けいただきありがとうございます。それに素敵なお部屋も。今度武術を教えてください。」

「なんと美しい姫。3歳でここまで話すとは。それに武術の稽古も。さすが天女の血ですね。では明日草原を馬駆けしましょう。」

「はい。」

いよいよ数日で鎮北王府に帰還だ。数か月の宿営生活も終わる。翠月に早く会いたい。

「衛星大將軍、鎮北王府からの使いです。」

狩場の宿営に報せが入る。

「通せ。」

屋敷の翠月になにかあったか・・・。

「鎮北王府が何者かに襲撃されました。白起將軍によって130名の敵は討ち取りました。王妃、王女、侍女は刺客に狙われ数名で屋敷から逃げましたが行方が分かりません。」

「襲ったのはどこの者だ。いつのことだ。」

「お帰りになりましたら白起將軍よりお話があります。」

「王妃と王女は無事なのか。」

「わたしにはわかりません。」

早く帰りたい。衛星は眩暈がした。

西夏の暮らしは穏やかな毎日だった。離宮の広大な土地を開墾し、作物や薬草を育てる。水車を組立て、山からの水を引き込んで梅の苗を植える。民に農法や工法を伝え、自給自足により近隣の村は豊かに生まれ変わる。

「嘉慶様が天女様を連れてきてくれてきつと豊作だ。いつ夫婦になるのか。そろそろおめでたい話はないのか。」

「嘉慶様は天女様に惚れている。天女様はどうだろうか。」

「翠星様の父上は誰なのか。」

村民の毎日は、嘉慶王子と天女の話で盛り上がる。

翠星は漠然將軍に武術を習い、王子に贈られた仔馬の世話をする。そろそろ馬術の稽古だ。皇宮で公務を終えた嘉慶は、即離宮に帰り翠月と過ごす。

「翠月殿、翠星王女はすごい速さで学問や武術を覚える。さすが天女の子だ。」

「それはいいことです。まだまだ教えることが山ほどあります。軍神の嘉慶王子や漠然將軍に、武術や剣術を教えていただけるなんて翠星は幸せですね。そろそろ騎馬もお願いします。」

「翠月殿、今晚は梅酒で月を眺めよう。」

「はい。喜んで。」

「父上、天女がわたしの離宮に逗留しています。晋王に命を狙われて、わたしを頼ってきました。妻に、王妃にと考えています。」

「離宮にいるのは聞いている。西夏は天女を娶るのか。天女はなんと。」

「いえまだ聞いてません。今晚、求婚するつもりです。」

「ここ数カ月、西夏は天女のおかげでさらに豊かになった。牧草地は枯れることなく、家畜も安定している。水車のおかげで、村の作物も順調、山の生き物が絶滅することはない。食糧危機はもう過去の話だ。これから薬草の取引はもちろん、梅林は素晴らしく、西夏の梅酒は逸品として他国に売れる。民は天女を敬い、西夏の

治政は他国が羨むほどだ。そして嘉慶との子ができれば天女か天子。どうかめでたい話を聞かせて欲しい。」  
「すべては翠月殿のおかげ。そうなればいいのですが。」

数カ月前。嘉慶は翠月からの文に小躍りした。晋から西夏へ入るとは。逗留といわず王妃に迎えたい。翠星は自分の子として大切に育てる。何より天女が自分を頼ってくれたことがうれしい。衛星から一步遅れたが、翠月との出会いはわたしが先だ。この機会は絶対に逃さない。王妃にすると決めた。

嘉慶は梅酒を持って翠月の部屋に向かう。庭園に宴の用意を指示する。

「翠月殿、美しい月です。」

「はい。ご一緒しましょう。」

山波を照らす美しい月だ。嘉慶は翠月と並んで梅酒を堪能する。翠月の横顔は美しい。

「翠月殿、今の気持ちを話しても。」

「はい。」

「わたしは命を助けられてから翠月殿だけを一筋に想ってきました。鎮北王妃になっても諦めてはいません。やっとできた縁です。どうかわたしの妻になってください。」

「わたしには翠星がいます。恐れ多くて。皇宮が許さないのでは。」

「わたしが誰も娶らないのは、翠月殿と夫婦になるためです。父はとっくに承知しています。今日も励まされました。翠星王女と仲良くここで暮らしましょう。」

もう愛する衛星の元には戻れない。

「……身に余るお言葉ですが、他の女子と愛を分け合うことは絶対にありません。」

「もちろんです。嘉慶は、翠月殿だけを一生愛するここに誓います。」

「はい。」

「本当ですか。承諾してくれたのですね。やったー。翠月殿が妻になってくれる。」

嘉慶が大声で叫んだ途端、屋敷から侍従や侍女、近隣の村人が庭に飛び出し喜ぶ。

「天女様が王子の妻になる。天女様のおかげで西夏はもっと豊かになる。」

「王子、逃げられないように早く婚礼を。」

「お祝いだ。早速婚礼の準備だ。」

嘉慶は翠月を抱きしめた。

「嘉慶様、皆が見ています。とても恥ずかしいです。」

「夫婦なんだから恥ずかしがることはないのでは。」

嘉慶は翠月を抱き上げ唇を重ねた。

「陛下、嘉慶王子の求婚が天女様に受け入れられたようです。離宮や周囲の村は花火を打ち上げ祝福しています。さすが天女様です。」

「それはめでたい。嘉慶はやっと天女を手に入れたのだな。くれぐれも晋に悟られないように。」

「はい。」

「白起、なにがあったのだ。」

「翠月様、翠星様の命が狙われました。首謀者は晋王です。衛星様を伴に遠征に出かけ、演習や皇宮の警護を理由に、鎮北王府から兵を離し、狙ったのです。皇宮の兵は軟弱で、策略もない洛総が100名の兵を率い、30名の刺客が晋王によって放たれました。愚兵は洛総もろとも皆殺し、刺客も一掃しました。多分、翠月様一行は月牙泉に向かったのではないかと。」

「なぜすぐに報せないのか。」

「首謀者が陛下であれば、遠征中の離脱は許されません。報せることを控えました。」

「真月殿に会いに行く。」

「首謀者は君主です。ここは慎重になりましょう。玉謹様がいるのです。」

「……どうしたらいいのだ。翠月はもう戻らないというのか。」

「衛星様、翠月様から文を預かりました。」

衛星は文を読んで泣き崩れた。そして君主への恨みと憎悪で、血が逆流するかのように身体が熱くなった。

西夏では天女と嘉慶王子の婚礼準備に追われていた。西夏の皇宮からの注文に涼の裁縫師は、最高の生地を手に入れるべく奔走。天女の羽衣のように生地をふんだんに使う贅沢な逸品に。刺繍は最高位の職人によって金糸で彩られる。金に糸目をつけない最上級の衣装だ。

離宮は深紅と金の装飾に、邸内すべてに牡丹の花が生けられる。祝い酒は西夏の梅酒だ。嘉慶と翠月の意向で、当日の宴は村人も参列し、ご馳走が振舞われる。厨房や侍従、侍女は大忙しだ。

翠星の衣装は、翠月とお揃いで愛らしさが際立つ衣だ。お忍びで涼から秋虎、真月、陽西が参列する。

婚礼衣装に袖を通し化粧をした翠月に侍女が驚愕。

「なんと美しいのでしょうか。常人とは思えません。まさに輝く天女様です。嘉慶様は天女様を娶るなんて幸せです。」

待ちきれない嘉慶は翠月の部屋へ。

「翠月殿、侍女があまりにも美しいと話すのを聞いて……。もう待てない。姿を見せて欲しい。」

「慌てなくても逃げません。ご覧になってください。」

そこには眩しいくらい美しい天女がいた。

「わたしはこんなにも美しい天女を妻にするのか。夢のようだ。どうか夢なら醒めないで欲しい。」

嘉慶は翠月の手を取り引き寄せた。周囲は見つめ合う二人に祝辞を述べた。

「そろそろ陛下がお着きです。」

「翠月様、西夏王妃になるのですね。益々涼との絆は強く、両国は繁栄するでしょう。」

「真月、本当にありがとう。話したいことがある。」

「なんでしょう。」

「北臨と燕を調べて欲しい。」

「わかりました。」

「翠星は。」

「陽西殿の元に。」

参列者から感嘆の声があがる。

「なんと美しい夫婦だ。」

「天女を妻にすると、さすが西夏の王子。」

「天女様は絶世の美女だが、嘉慶王子も素晴らしく立派だ。西夏はこれからも繁栄し続けるだろう。」

「翠月殿は噂通りの美しさだ。天女のおかげで西夏は食糧危機から脱し、自給自足だけでなく、逸品も多く生まれ、交易も盛んだ。国は富み、民の生活は潤い、嘉慶の治政は素晴らしい。これからも二人で西夏の安寧と繁栄に貢献して欲しい。」

「はい。陛下のご期待に応えられるよう精進いたします。」

離宮とはいえ、華やかで贅を尽くした婚礼だった。涼からの客人は、離宮の客間に通され明日帰還する。翠星は陽西から離れず、眠らずやっと寝かしつけてもらった。

「陽西様、ありがとうございます。おかげさまで助かりました。」

「草月殿もお疲れでしょう。それでは部屋に戻ります。」

明日、陽西との別れに翠星は大泣きするだろう。

「翠月殿、わたしの妻になってくれてありがとうございます。命を助けてもらった日から、いつか翠月殿を妻にすると心に決めた。やっと願いが叶ったのだ。何よりも誰よりも心から愛し、大切にすると誓う。ずっと傍にいて欲しい。」

「鎮北王妃だったわたしでいいのですか。嘉慶様には各国の公主と縁談があるとか。」

「天女翠月の他に誰がいるのか。わたしには過ぎた妻だ。翠星王女は我が子。どうか父と認めて欲しい。」

「そのうち父上として嘉慶様を慕うでしょう。あまり気になさらないように。」

嘉慶は寝台に並ぶ翠月の面紗を上げる。そこには嘉慶を見つめる翠月の瞳が輝いていた。

「翠月殿、わたしは積年の想いが叶う。身体が震えるのだ。」

「これで震えがとまります。」

翠月は嘉慶の頬を掌で包み込み唇を重ねる。

嘉慶は瞳を閉じて翠月の口づけに応えた。そしてそのまま翠月に身体を重ねた。

これは夢か……。隣に眠る翠月を抱き寄せ嘉慶は翠月の温もりを確かめた。痺れるような快感に溺れ、気を失いかげながら夢中で抱いた。翠月は指と唇で嘉慶を翻弄しながら、頂点へと導く。さすがの嘉慶も官能の渦に巻き込まれ尽き果てた。天女との房事はこの上なく刺激的だ。嘉慶が翠月を征服するにはまだ時間が必要だ。

眠る翠月の肌を指でなぞりながら、寝息で上下する豊かな胸の感触を楽しむ。翠月の唇から喘ぎ声が漏れる。嘉慶は欲情し、翠月の唇を塞いだ。夜明けにはまだ早い。

砂漠に隠れる月牙泉の近くに衛星が立つ。

「族長、翠月はどこですか。翠星は。」

「やはりここに来ましたね。晋王に命を狙われた翠月と翠星はもう鎮北王府にはいません。天女存在を恐れたのでしょう。翠月との縁はここまでです。どうか玉謹を立派な鎮北王に、そして晋王に育ててください。」

「玉謹が晋王ですか。険しい道のりですね。現晋王はこの手で抹殺したい。」

「玉謹は陽蓬妃と衛星将軍の子です。身に覚えはありますね。」

「……………」

「陽蓬妃は、誰にも知られず燕王の子として育てたのです。凡庸な燕王の血では、あそこまで立派に育たないでしょう。お気づきかと思いましたが。もちろん翠月は知っています。」

「たった一度の契りでした。わたしにとっては生涯忘れられない思い出です。翠月にも言えなかった。まさか玉謹様が……………」

「衛星将軍は玉謹を晋王に育てるのです。そして玉謹の命の恩人である天女水心を迎えるのです。兄の龍泉も俗世に入り、いずれ出会うこととなります。兄妹の助けで燕を滅ぼし、晋王になるでしょう。」

「本当ですか……………」

「運命ですから。翠月が龍泉と水心を玉謹の元に導くでしょう。どうか翠月と翠星は忘れてください。」

「村に戻ったのですか。」

「……………まだ翠月には天女としての使命が残っています。」

「他国にいるのですね。」

「探さないことです。もう衛星将軍との縁は君主の謀略によって切れましたから。」

「辛すぎる……………翠星はわたしの子です。」

「だから晋王を狙われたのです。俗世と天女との縁はまだこの先続きます。玉謹を立派に育ててください。」

「翠月を必ずこの手に戻します。添い遂げると誓ったのです。」

「晋王がいる限り難しいでしょう。おわかりのはずです。玉謹をよろしく願います。これはあなたを全身全霊で愛した翠月の願いです。」

## 北臨の軍神

北臨は砂漠を背に、燕、晋、西夏、一部を涼との国境に挟まれた小国だ。歴代の優れた君主によって、銅山を持ち、塩を商いする裕福な国が北臨だ。

他国と争うこともなく、各国から集まる商人や職人が移住し、独自の治政で繁栄している。

皇宮の争いが絶えず、愚帝によって治政が乱れる燕は、北臨の資源を手に入れようと画策していた。銅山と塩道を守るのは、武神と名高い華僑大將軍親子だ。鉄壁といわれる守りで燕兵の侵略を防ぐ。

砂漠を控える銅山では、常に燕兵との攻防が絶えない。

華僑大將軍の息子、楊翔は銅山から燕兵を引き離し、矢傷を負いながら洞窟へ逃げ込むが、翌朝燕兵に包囲されて絶体絶命。死を覚悟した。

「華僑の息子、楊翔を討てば北臨の半分は手にしたも同然。燕に運が味方したのだ。この洞窟で楊翔は終わるだ。」

20 騎程か……。砂漠の洞窟で終わるとはなんとも悔しい。

楊翔が覚悟したそのとき燕兵の叫び声が。何があったのか……。

洞窟に黒い塊が飛び込んできた。洞窟の外が静かだ。

「矢傷の出血がひどい。もう心配ない。ここを出て傷の手当てを。」

スーッと眼前が暗くなる。楊翔は気を失った。

「ここは……」

「目を覚ましたか。ここは陽華泉だ。」

まだ幼さが残る女子と、楊翔と背格好が同じくらいの男子がいる。

「燕兵は始末したから安心しろ。葉草で手当てをした。馬は畔で休んでいる。傷は深いが出血は止まった。」

「助かりました。わたしは北臨の楊翔、華僑大將軍の息子です。」

「わたしは龍泉、妹の水心だ。黒い塊に見えたのは、隆貴と涼貴だ。」

「神獣……」

「狼だ。ちょうど砂漠を駆けていたら燕兵が洞窟の前に。砂漠を荒らす燕兵は嫌いだ。」

「命拾いしました。それにしてもどうやって 20 騎程の燕兵を。」

「大したことはない。わたしと水心とこの 2 頭がいれば始末できる。傷が癒えるまで数日ここで養生するとい。食糧もあるし、温暖だから。」

数日後、龍泉、水心兄妹は楊翔を北臨と砂漠の国境まで送った。

「いつか恩返しをさせて欲しい。この玉牌を見せれば、北臨との国境から將軍府へ入れます。必ず訪ねてきてください。」

「今度砂漠で戦うときは加勢する。」

兄妹は巨大な狼にそれぞれ跨り、砂漠へ消えていった。

兄妹は神獣を操る月牙泉、陽華泉に住む巫族だ。涼、西夏に天女がいるという噂は耳にする。あの兄妹も間違

いない。また会いたい。

## 北臨と西夏

「嘉慶様、北臨が燕に襲撃されます。燕兵は数が多い。さすがの華僑軍でも相当苦戦するでしょう。加勢し、西夏は北臨と結束すべきです。銅山や塩の取引を推進すれば、両国が豊かになるでしょう。燕を挟み撃ちにします。わたしに策があります。西夏の精鋭兵1万で向かいます。」

「わかった。すぐに砂漠へ行くぞ。」

「先に500騎で翠月が入ります。燕兵の位置は上空から報せます。」

翠月は狼貴、狼華を引き連れ砂漠へ向かう。泉児の真下が戦場だ。

前方に北臨陣営に向かう2頭の馬と漆黒の狼を捉えた。龍泉と水心か・・・。

二人は翠月同様、燕軍後方から黒い馬に跨り、両手に剣を携え、燕兵の中央に飛び込んでいく。馬から落とされ、左右に蹴散らされ、刺殺され燕兵の軍列が乱れた。

そこへ翠月と500騎の西夏軍が突進。乱れる燕兵を斬り殺し、駆け抜ける。

「北臨軍が見える。一気に駆け抜けろ。」

翠月の号令で500騎が北臨軍の前に。錯乱した燕軍は見えない。翠月の正面に龍泉と水心、2頭の神獣が。

「龍泉、水心、見事な加勢だ。」

「翠月様、久しぶりです。西夏軍ですね。北臨に加勢ですか。」

「龍泉殿、水心殿。また助けていただいたようだ。数では燕が勝る、苦戦を強いられていたのだ。そちらは。」

「砂漠の戦には加勢すると約束しましたから。あちらは西夏の天女、翠月様です。」

「楊翔殿、後方から嘉慶王子率いる西夏軍が燕を攻めています。挟み撃ちにしましょう。」

北臨軍と強靱な西夏軍1万に挟まれ、燕は惨敗だ。

「翠月王女、嘉慶王子に楊翔がお礼を申し上げます。北臨の恩人です。」

「燕は盟約を破り、いきなり攻め込む。噂通りの卑怯な君主だ。西夏もだいぶやられたのです。これを機会に北臨と西夏で盟約を結びましょう。」

「はい。近いうちに。」

「龍泉、鷹は使わないのか。」

「水心が鷹の水児を従えています。」

「それでは兄妹で北臨に入り、水児を西夏へ飛ばすように。將軍を国境に出迎えます。」

「はい。」

嘉慶は翠月の戦術、武術、そして度胸に惚れ惚れする。北臨に向かう若き兄妹も素晴らしい戦いぶりだ。馬上を飛び、剣を振り、神獣を操る姿は天女と軍神。北臨は強国となる。

楊翔は天女を見た。向かう敵を次々斬り殺し、突進する姿は恐ろしく美しかった。嘉慶王子の妃と聞いた。知力、武力、胆力すべてが常人ではない。この兄妹もそうなのだろう。西夏と涼は深い絆という。北臨もそうあるべきだ。

水児が西夏の離宮上空を舞う。翠月の合図で地上に降りた。足環を外す。

「北臨君主は、西夏国の申し出を受けたいとのこと。華僑大將軍の兵100騎が国境へ向かいます。  
楊翔 筆」

「山の麓の牧草地に宿営を設けます。西夏の銘酒でお迎えます」。

嘉慶 筆

麓にはいくつもの幕舎が設営された。食糧も酒も用意され、両国の友好を深め、兵を労う宴だ。  
豊富な資源と塩で潤う北臨。いまや豊かな食糧、鍛冶、銘酒、機織物、薬草など生活に必要なものを作る西夏は盟約によって、両国とも益々豊かになる。

天女によって各国が盟約を結ぶ。交易を盛んにし、隊商が行き交い国を豊かにする。民と国を亡ぼす戦国時代は終わりにしたい。

## 西夏への恩返し

西夏は北臨の資源である塩と銅山の交易でさらに豊かになる。

北臨は豊かな物資で溢れる西夏との交易によって、卑怯で姑息な燕と国交を断つ。西夏との盟約によって涼、晋とも友好関係を築くことができた。まさに天女翠月の思惑通りである。

嘉慶は翠月と覇業を成し遂げ、益々西夏に繁栄をもたらした。

「殿下、翠月様が気を失われて寝所に運び込まれました。」

「翠星と馬駆けに行ったのでは。」

「はい。落馬し、護衛の結城将軍によって運ばれました。」

「翠星は。」

「ご無事です。侍医が向かいます。」

嘉慶は皇宮から馬で離宮に急ぐ。

「翠月はどうなんだ。」

侍医が念入りに脈を診る。

「殿下、翠月様はご懐妊かと。2月ほどのようです。おめでとうございます。」

「本当か、確かなのだな。落馬の影響はどうなんだ。やっとできたか、随分待ちわびたぞ。いつ目が覚めるのだ。」

「もう少しすればお気づきになるでしょう。少々脈が不安定なので安産の薬湯をご用意します。」

「下がれ、ここはわたしが看るので翠星に報せてくれ。」

「はい。」

「ここは。」

「気を失って運ばれた。侍医によるとわたしとの子ができたのだ。どうか大事にしてほしい。」

「嘉慶様との子ですね、うれしい。半ば諦めていました。天が授けてくれたのですね。」

「翠星に弟か妹ができるなんて・・・きっと喜ぶだろう。」

「父上、母上に赤ちゃんができたのですね。うれしい。わたしが武芸を教えます。」

「待ち遠しいな。」

西夏は懐妊という吉事に沸いた。

翠月は、天女は難産という言い伝え通り三日三晩苦しみ続け、公子を無事に出産した。

「殿下、美しい公子様です。」

「翠月は。」

「意識が朦朧としていますが、すぐにはっきりします。」

嘉慶は翠月の額に口づけをする。

「ありがとう、翠月。」

「嘉慶様、子は無事でしたか。」

「元気な男子だ。名は嘉月とする。」

「いい名です。」

こうして無事に西夏の後継者が誕生した。嘉慶に恩返しのできたのだ。

翠月は、香月と草月を呼ぶ。

「香月、草月、無事に公子を生むことができた。嘉慶の元で立派に育つだろう。翠星と共にこれからもよろしく頼みます。西夏に天女と天子がいる限り益々繁栄する。やっと嘉慶に恩を返すことができた。」

「翠月様は西夏を去るのですか。」

「時機を見てだ。どうしてもわたしは晋王が許せない。玉謹、翠星、そして最愛の衛星を苦しめ、わたしたちの鎮北王府を崩壊させた。玉謹を晋王に擁立するには現王を抹殺しなければ。」

「鎮北王府はどうなるのですか。」

「翠星を公主として婿を取ればいい、立場でいえば駙馬だな。それに衛星もまだ若い。」

「確かに翠星様で十分ですが、鎮北王府には駙馬が必要です。」

「どうやって晋王を。」

「晋王が好きな狩りの季節を狙う。わたしははずさない。そして月牙泉に狼貴、狼華、泉児と戻るつもりだ。」

「わたしたちもこちらでのお役目が終わりましたら戻ります。」

「まだ少し先の話だが、そのつもりでいて欲しい。」

「はい。」

嘉月の成長は早く、翠星はよく面倒を見る。師弟関係のつもりか、武術を教えている。嘉月も姉に倣い成長していった。嘉慶は姉弟に稽古をつけるのが楽しい。

「翠月、わたしは幸せだ。この幸せが一生続くことを祈る。わたしの傍にいてくれてありがとう。」

「そう言っていたいただきわたしも幸せです。嘉慶様はわたしと翠星にとって命の恩人です。」

## 燕の策略

涼、北臨はそれぞれ強国西夏と盟約を結び国も繁栄。豊かな晋は隊商により各国と交易が盛んだ。北国燕はたびたび北臨領を襲撃、晋との国境を脅かし、砂漠を荒らす。極寒のため土壌が貧弱、家畜も育ちにくく、河川の凍結で食糧難に悩まされている。兵力を増強し、食糧を求めて他国との国境を攻めるしかないので、益々土地は劣化、民力は衰えるばかりだった。

「陛下、強国西夏と北臨が盟約を結んだ今、策を講じなければ燕は生き延びられません。そこで北臨の兵を装い、晋の隊商を襲撃して交易品を奪います。晋は北臨を攻めるでしょう。北臨の華僑も晋の鎮北王には敵いません。西夏は援軍を出して晋と交戦するでしょう。燕は精鋭を揃え、北臨との戦で手薄な晋の国境を攻め落とします。」

「正攻法とは言えないが燕らしい。離間の策で漁夫の利か。」

「はい。いまの燕にとっては上策です。涼の秋虎が晋に援軍を出す前に一気に攻めましょう。」

「晋の鎮北王、西夏の嘉慶、涼の秋虎、北臨の華僑と燕は苦戦を強いられるばかりだ。」

「鎮北王、晋の隊商が行方知れずとなり荷は消えました。それも数回にわたります。一度調べる必要がありますが、北臨の兵に襲われたらしいです。」

「なんで北臨が・・・。」

「北臨兵の衣を着ていたとの証言がありまして・・・。」

「北臨がなぜ晋の隊商を襲うのだ。それが真実なら北臨を攻めるぞ。華僑に至急つなぎをとるように。」

「晋の隊商が北臨兵に襲われ、荷ともに行方知れず。釈明願いたい。 鎮北王 筆」

「北臨兵が隊商を襲うはずがない。すぐに搜索するように。」

「龍泉、水心、晋の隊商が北臨兵に襲われるとの知らせが鎮北王より入った。そんな場所に北臨の兵が行くはずもない。何かありそうだ。調べてくれないか。」

「はい。直ちに。」

龍泉、水心兄妹は隆貴、涼貴、水児を伴に、燕と北臨から晋に向かう砂漠一帯を見張る。巫族の二人にとって木々に閉ざされた洞窟は宿営に快適だ。

二日後の夕刻、水児が鳴く。30名ほどの兵が岩陰に隠れ通行する隊商を狙っている。一気に駆け下りた。隆貴と涼貴が追う。

隊商は剣を携え、急襲する兵に立ち向かう。商人ではない。こちらは晋の兵だ。

「龍泉、北臨の軍服を真似た偽者だ。生け捕るぞ。」

水心は隊商に襲い掛かる偽者を斬りつける。

「わたしは北臨の楊翔將軍の配下だ。この者たちは北臨の兵ではない。証として生け捕りにする。」

涼貴と隆貴が偽者を押さえつける。晋の隊商は鎮北王の兵だ。

生き残った偽者に問いただす。

「お前はどこから来たのだ。襲われた隊商と、荷はどこに消えた。なぜ北臨の兵服を着ている。答えなければ殺す。」

「燕兵だ。晋からの隊商を、北臨兵に扮して襲えとの命だ。隊商は殺され、荷は燕に運ばれた。兵服は酷似した偽物だ。」

「鎮北王に燕の仕業と報せて欲しい。まさに北臨は濡れ衣を着せられたわけだ。このお返しは10倍にしてやる。北臨に報告したら鎮北王に面会を求める。玉謹殿下に水心と龍泉が会いに行くとお伝えしてくれ。捕らえた燕兵の始末はそちらにお任せする。」

「はい。伝えます。」

## 再会 玉謹と水心、そして翠星

「北臨より華僑大將軍の使者、龍泉と水心です。鎮北王に拝謁を願います。」

「お待ちしていました。どうぞこちらへ。」

前方から遠目でも容姿端麗とわかる男子が駆け寄る。

「水心、玉謹です。会えてうれしい。龍泉兄は將の佇まいですね。ようこそ鎮北王府へ。父衛星はこちらです。」

晋の軍神、衛星大將軍は翠月様と夫婦であった。晋王の急襲で引き裂かれたが、翠月様を想い、その後は妻を娶ることはないと聞く。やがて時期がきたら罪深い晋王は翠月様が仕留める。天女の命を狙えばその代償は払うべきだ、たとえ一国の王であってもだ。

「わたしが衛星です。巫族の村で玉謹が命を救われたと翠月に聞きました。いまは北臨に逗留しているのですか。」

「はい。燕の襲撃から楊翔將軍を助けた縁で、隊商の件を捜索していました。北臨のふりをする燕兵でした。北臨への疑念は消えましたか。」

「もちろんです。時期を見て燕を討ちます。」

「北臨も西夏の援軍と呼応して燕を討ちます。土地は枯れて、家畜、作物も育たず民は苦しむばかりの暴政。素晴らしい工芸や芸術、医術、造形美など才知溢れる燕です。それもわからず、砂漠を荒らして、各国から略奪を繰り返す皇宮の住人は抹殺すべきです。」

「北臨も天子と天女によって益々繁栄しますね。西夏と盟約を結んだとか。燕が敵うはずもない。燕は晋が攻め墜とすので、銅山や塩田はそちらで死守してください。戦によって手薄になった晋の領地は、涼国に援護を頼むつもりです。」

「承知しました。主君に必ず伝えます。」

「今日はゆっくり王府でお休みください。夕食の準備が整うまで市場の散策もいいでしょう。玉謹が案内します。」

「ありがとうございます。」

母の形見である玉の簪を刺している水心は美しい。色は白く、桃色に染まる輝く肌、花びらのような唇。振る舞いはしなやかで背丈は高く、まるで雪原の女豹、母上のような。やはり母上の言う通り天命なのか。北臨は強国となり、益々繁栄するだろう。母上と翠星はいったいどこにいるのか。

玉謹の腕には深緑に輝く玉の腕輪が。忘れずに身に付けてくれていた。翠月様の言う通り、玉謹と覇業を成す天命なのか。伴に燕を滅ぼし、晋国を統べるのか。

衛星大將軍と燕の陽蓬妃の血を継ぐ玉謹は、傑出した当主になるだろう。水心とともに晋国を統治する。翠月様の予知力は絶対だ。水心は晋を、わたしは北臨に尽力しよう。

「衛星、甥である玉謹を後継とする勅命をここに記した。余に何かあれば告示するように。そして鎮北王の後継を指名して欲しい。」

「はい。まだ陛下は若く健勝です。私の後継を急ぐつもりはありません。」

「そろそろ鎮北王の後継を育てるためにも妻を娶るといのはどうだ。」

「いえ、翠月の他は考えられません。この件はご容赦ください。」

「……。」

自分で刺客を仕向けておいて……。愛する者がバラバラになったのだぞ。許さない。

衛星も男だ。時期を見て娶らせよう。鎮北王の後継は絶対だ。天女は忘れるべきだ。

## 愛する人のために

鎮北王府に大きな鷹が舞う。衛星めがけて庭園に降り立った。

「翠月か。」

衛星は足環を外す。懐かしい文字だ。

「衛星様、わたしは狩猟期を狙い晋王を抹殺します。これを俗世の最後に月牙泉に帰還します。晋王を排除し、玉謹を玉座に。水心は素晴らしい皇后になるでしょう。」

まず晋は燕との国境3州を墜としてください。燕が孤立したら、北臨と呼応して皇宮を壊滅。民は殺さず、街は壊さず、燕の素晴らしい民力を継承します。燕王に配慮する晋王は3州を墜とした時点で抹殺します。

鎮北王の後継については、翠星を衛星様の元へ。いい相手がいればともに玉謹を盛り上げていくでしょう。

愛する衛星様と添い遂げられず後悔ばかり。月牙泉で玉謹の治政を見届けます。

どうかご自愛ください。 翠月 筆」

衛星は涙で文字が読めない。翠月に会いたい。月牙泉を訪ねよう。必ず玉謹を晋王に、まずは燕を征服してからだ。

「翠月、手紙を読み涙が止まらなかった。わたしは生涯翠月と添い遂げると決めている。国境3州を墜とす前に我が娘翠星をこちらへ。晋王抹殺は翠月に任せるので、燕攻めはこちらに任せて欲しい。」

無事玉謹が王に、翠星に鎮北王府を譲り月牙泉に向かう。余生は共に静かに生きよう。 衛星 筆」

衛星様とまだ縁があるのか。すべてを終えて平穏に暮らしたい。それまでまだ戦いは続くだろう。

「あれは翠月様、鎮北王妃か。」

「たしか洛総の急襲で絶命したはず・・・。」

「すぐに白起将軍に報せろ。」

白起は正門に急ぎ向かう。そこには軍服姿の翠月がいた。

「翠月様・・・。」

「翠星です。命の恩人の白起将軍ですね。おかげさまで無事に成長しました。母翠月より文を預かりました。王府まで案内してください。」

「白起将軍、命を助けていただいた翠星は立派に成長しました。武術はわたしを超える腕です。父鎮北王の元で玉謹を支える逸材に育ててください。どうか翠星をよろしく願いいたします。 翠月 筆 」

「翠星か。翠月に瓜二つ、立派になった。会える日を心待ちにしていたぞ。翠月は達者なのか。どこにいるのだ。すぐに会いたい。」

「そのうち会えます。母上にはまだ使命があるとのこと。父上はご存知と聞いています。父上に会いたかった。」

翠星は馬術も武術も父上譲りです。立場上、しばらく男子で通しますのご配慮を。」

「翠星、帰ってきたのか。」

玉謹は人目も気にせず、翠星に抱き着く。

「兄上は将の風格、ご立派です。」

「翠星は母上に酷似して、草原の白豹のようだ。部屋と侍女は用意してある。夕餉まで休んでくれ。」

「はい。わたしは兄上の師弟、男子で通します。」

「玉謹、皇宮に翠星を知られるわけにはいかない。」

「師弟ということにします。白起將軍他、身の回りの世話は信頼できる者を付けます。」

「頼んだぞ。」

龍泉、水心が鎮北王府に入る。

「翠星様ですね。陽華泉の龍泉兄と水心です。玉謹様とは、幼少の頃に巫族の村で友となりました。いまは北臨に逗留しています。」

「兄の命の恩人ですね。国境を攻めるべく、母の命で晋に入りました。」

「西夏王妃翠月様ですね。北臨は西夏に助けていただきました。」

「玉謹様はやがて晋王に、翠星様は鎮北王府の後継者ですね。」

翠星と水心の男装姿は美しかった。背が高く、しなやかな身体、長い手脚。色は白く、輝く大きな瞳。まさに天女だ。水心と翠星の存在は王府を華やかに彩る。

「父上、明日涼の真月様を訪ねます。」

「伴を付けよう。」

「一人で十分です。わたしは父上と母上の娘、そして玉謹の妹です。」

「そうだった。」

「親愛なる真月

真月、翠星は鎮北王府に入り、燕との国境攻めに参戦する。玉謹は晋王、翠星は鎮北王府に。わたしは燕の国境3州が陥落した後、晋王を抹殺する。天女の命を狙った罪は重い。さらに燕の皇宮と断絶、玉謹を皇帝にするために排除すると決めている。どうか玉謹と翠星を助けて欲しい。水心、龍泉もいる。秋虎殿とのお子はやがて涼を治めるだろう。そろそろ次世代による平和の世が見えてきた。やがてわたしは月牙泉に還る。余生は衛星と過ごすつもりだ。 翠月 筆」

翠月様は衛星様と隠棲なさるのだな。戦乱からこの世を救い、豊かな国を造り上げた最上級の天女だ。そろそろ愛する人とゆっくりしていただきたい。

真月は秋虎との間に、秋月、虎真の姉弟を産んだ。父母に似て眉目秀麗、文武に秀でる逸材だ。やがては涼を治めるだろう。巫族の血は次世代に継がれ、平穏な世が訪れることを願う。

「真月様、鎮北王府より翠星様が正門に。」

「すぐに迎える。」

「真月様、命を助けていただいた翠星が立派に成長しました。西夏より鎮北王府に入りましたので、秋虎様と真月様にご挨拶を。」

城下から、黒馬「有秋」を引いた虎真と、陽西將軍の甥、秋西が將軍府へ戻る。

中庭に輝く美しさの麗人が……。虎真、秋西の視線を捉えた。

「母上、客人ですか。こちらは……」

「鎮北王と翠月様のご息女で玉謹様の妹君の翠星様だ。これは息子の虎真です。翠星様より3年ほど後に生まれました。もう一人は陽西將軍の後継で甥の秋西です。」

翠星はずっと恋焦がれた陽西將軍に酷似する武人から目が離せなかった。

「初めまして玉謹の妹、翠星です。数日の逗留をお許しください。ぜひ馬駆けに、同じ駿馬同士ですから。」

「秋西、翠星様を梅院にご案内を。後ほど秋虎、娘の秋月とともに夕餉をご一緒しましょう。」

「秋西殿、陽西將軍は息災ですか。まだ独り身と聞いておりますが……。わたしの初恋の相手にお会いしたい。」

「はい。独り身を通しています。宴で再会できます。」

「甥と聞きましたがよく似てますね。驚きました。」

「はい。よく言われますがわたしは若い。」

「そうですね、明日はぜひ一緒に草原へ。陽西將軍は騎馬の名手でしたから。」

翠星は酒宴で陽西將軍と再会した。この日をずっと待っていたのだ。幼い頃に陽西と夫婦になると誓ってから……。

美しい。天女と軍神の血を受け継ぎ、光り輝く翠星様がいる。きっと素晴らしい相手と一緒にいるのだろう。再会できただけ幸せだ。

いよいよ国境攻めの軍略会議だ。

「玉謹は白起と正面から5万の兵で攻める。翠星はわたしと山を背に左側面から。龍泉、水心兄妹は北臨との国境から。北臨の華僑大將軍は北臨の塩田と銅山を死守しながら燕からの民を受け入れて欲しい。手薄になる晋は、涼の秋虎大將軍の兵で固める。涼は強靱な西夏軍のおかげで誰も責めることはない。」

燕兵は10万程。こちらは20万の兵に豊富な武器をもって一気に攻める。2日で3州を墜とし、それぞれの州を復興させる。

時期を見て玉謹の兵5万で燕の皇宮を攻め一掃、再興とする。民を殺さず、街を壊さず、民力を生かすのだ。極寒の時期を迎える前に終わらせる。燕は北臨が都、国境を晋で分け合うのが良策だろう。」

「はい。承知しました。」

燕は国境を墜とされたら、縁戚を持ち出し晋王に和議を申し立てるはずだ。  
晋王は衛星が燕の壊滅を狙っているとは思わないだろう。玉謹は燕王の子と信じている。  
玉謹は衛星と陽蓬妃の息子だ。燕に未練などない。

翠月は愛する家族を離散させ、翠月と翠星の命を狙った晋王を抹殺する。

衛星、玉謹の戦略通り、領地領民は無事、国境3州は晋の国旗が掲げられた。

「衛星、国境を奪取したことだし、皇宮には手出しするな。燕王は玉謹の父、縁戚になる。これで燕も静かになるだろう。」

「陛下、狩猟期に入りました。皇宮の兵を連れて宿営なさってはいかがですか。」

「そうだな。すぐに発とう。衛星はどうするのだ。」

「まだ国境が安定していないので、鎮北王府は治政に注力いたします。」

「そうしてくれ。」

「水心、翠月に文を頼む。」

「はい。」

「翠月、晋王は禁軍兵200名と狩場に入る。安心感なのか護衛もそう多くはない。晋王は天女に狙われたら命はない。まずは国境を占有してからだ。燕を壊滅し、玉謹を晋王、翠星に鎮北王府、すべて引き継いだら月牙泉へ向かう。余生は二人で過ごそう。 衛星 筆」

## 民は殺さず、街は壊さず

「父上、幼少の頃の燕での師匠、軍師陳郁殿、楊法將軍、海照殿の去就が判明しました。」

「逸材がどこで埋もれていたのだ。隊商を襲うなどと姑息な悪策などありえない。」

「はい。実は陳郁殿は燕の皇帝に疎まれ国境の幽州に、楊法將軍は北臨に近い僻地へ。海照殿は晋に近い国境にそれぞれ左遷されました。戦略家である師たちが晋や北臨、涼と交戦するとは考えられません。燕が壊滅するだけです。皇宮は皇帝に都合の良い悪臣で固めているのでしょうか。師匠たちは秀逸です。龍泉、水心を遣いに出してみてもは。」

「内外呼応して国境を無傷で占有。逸材をこちらに迎える。良策だ。早速指示を。」

「はい。」

「龍泉兄、燕の逸材をこちらに引き入れたい。晋、北臨の僻地に皇帝から疎まれる燕の逸材が埋もれています。このまま燕と命運を共にしては惜しいのです。」

「わかりました。それでは文をお書きください。会ってみます。あとはわたしに任せてください。神獣と猛禽を伴い水心と向かいますので。」

「玉謹です。師匠の教えに倣い、鎮北王府で晋国の安寧に尽力してきました。燕との戦にはいりません。どうか師匠の才知を燕に埋もれさせることなく平安の治政に活かしてください。民は殺さず、街は壊さず、民力を生かす国を共に造りましょう。 玉謹 筆」

「殿下からの文です。燕の逸材、陳郁殿、楊法將軍、海照殿それぞれに宛てた文です。燕の皇宮を見限り平安な治政を望むなら、われらとの交戦は避けてください。殿下の命で民、街は守ります。」

「龍泉殿、極寒の燕は民力が高く逞しい。治政を担う者が秀逸であれば、素晴らしい国に生まれ変わる。是非晋、北臨と交易を広げ豊かな国へと導いて欲しい。」

「まずは各国の隊商が物資を運び、疲弊した民と街を救援します。私どもの兵は交戦することなく皇宮へ進軍します。国境3州は数月で生まれ変わるでしょう。再興の為の治政にご尽力いただきたい。」

晋、涼、北臨から多くの物資を積んだ隊商が燕の3州に入った。西夏軍が護衛する。

「陛下、国境が陥落しました。」

「誰が・・・鎮北王か。都を攻めるのか。」

「いえ、3州に留まっているようです。鎮北王の軍、とても敵う相手ではありません。」

「すぐ晋王に縁戚を理由に、皇宮攻めを思い留まってもらえるよう使者を出せ。」

「はい。」

晋王は宿営しながら狩猟に明け暮れていた。

冬眼前の森は獲物が豊富だ。

国境を墜とせば燕は抵抗することもない。当分は安泰だろう。

霧が覆いかぶさる夜、護衛の兵は眠気に襲われる。一人残らず深い眠りに落ちた。

神獣2頭を従え漆黒の馬に騎乗する翠月がゆっくりと宿営に入る。

一段と大きな天幕に入ると、奥の寝台に眠る晋王を見下ろす。

「天女の命を狙ったら、己の命で代償を払うのだ。晋は玉謹が治める。」

翠月は剣で胸を一突き、晋王は声もなく逝った。

玉謹や翠星を阻むであろう晋王の側近20名程は、神獣によって喉を噛み切られ絶命した。

その恐ろしい一部始終を、真月は宿営地を見下ろす丘から眺めていた。

明朝、眠りから覚めた兵は血に染まる死体を見て震え上がるだろう。

翌朝、狩場の宿営が急襲された一報が鎮北王府に入る。

「鎮北王、陛下の宿営が何者かに襲われました。陛下は胸を一突き、主だった側近は喉を噛み切られて血の海だとか。」

「わかった。すぐに皇宮に向かう。」

衛星をはじめ玉謹、翠星、龍泉、水心、白起は翠月とすぐに理解する。

「玉謹、陛下に勅命を発するよう命じられた。皇宮に向かうぞ。」

「わたしもですか。」

「玉謹、お前が晋王だ。すぐに燕を墜とす。」

即日、晋王崩御、新たな晋王に甥である玉謹との勅命が下された。

新王は自ら兵を率いて燕の皇宮を攻め、燕王と皇宮の住人をすべて抹殺。民は殺さず、街は壊さずに左遷された海照、陳郁、楊法の賢人によって国の立て直しに着手した。

燕は北臨と晋が領土を分けて統治する。

## 玉謹と翠星のこれから

玉謹は鎮北王府の殿下から、晋の皇帝に即位する。

「父上、わたしは陽蓬妃と衛星大將軍の子ですね。」

「いつ知ったのか。」

「母上が教えてくれました。素晴らしい血筋を誇りに晋を統べる君主になるようにと。そして命の恩人水心を娶り、幸せになりなさいと言われました。」

「そうか・・・母上が。」

「水心との婚礼の準備に入ります。妻は水心しか考えられません。」

「天女は他の女子と愛を分かち合うことはできない。後宮はどうするのだ。」

「水心とたくさんの子を成します。父上も秋虎大將軍も側室は持ちません。他国との均衡のための婚礼は誰も幸せになれない。もう必要ないでしょう。」

「玉謹が皇帝だ。好きにすればいい。水心の気持ちは確かめたのか。」

「これからです。」

「吉報を待っているぞ。」

「はい。」

「秋虎大將軍に翠星が拝謁願います。」

「美しくなったなあ。涼から西夏に入ったのは3歳の女兒だったのに、文武に優れた女子に成長した。」

「はい。大將軍にお願いがあります。翠星を陽西將軍の妻にしてください。」

「え・・・陽西と翠星殿が夫婦に・・・だいたい年の差があるようだが。」

「さほどではありません。巷の殿方は娘程の側室を迎えています。どうかお許しを。」

「陽西はなんと。」

「まだ気持ちを伝えておりません。まずは君主の許しを得てから攻めようかと。幼少の頃からの願いです、諦めません。」

「わたしとしては何も問題はない。健闘を祈る。鎮北王にはなんて。」

「これからですが、反対する理由はありません。ありがとうございます。」

天女と軍神の血を継ぐ美しい女子が、武骨で無口な中年の武人を慕うとは。それも幼少時の出逢いから一途に想い続けるなんて・・・。

翌朝、翠星は陽西を誘って草原へ馬掛けに出る。草原を照らす黄金色の朝陽が美しい。

「陽西殿、わたしを妻にしてください。出会ったときからの約束です。」

「え・・・なんと。」

「幼児との約束を反故にするのですか。」

「わたしとはだいたい年に差があります。翠星様は鎮北王と天女のお子です。一介の武人とは身分が違いすぎます。」

「各国に知れた軍師である陽西將軍に何の障害があるのですか。わたしのことを女子とは思いませんか。いつ

までも3歳児ではないのです。」

「いえ、身に余る光栄です。身分も年齢も違い過ぎてまるで夢の話です。」

「好きな女子でもいるのですか。わたしでは妻になれぬと。」

「いえ、信じられなくて。」

「わたしを妻にしてくれますね。」

翠星は陽西の胸に飛び込みぎゅっと抱きしめる。

陽西は戸惑いながらも翠星の背中に腕を回した。いつかは再会したいと願いながら、いつのまにか独り身が長くなった。あのかわいい女兒がかくも美しく成長し、妻にしてくれなんて夢のようだ。このままずっと醒めないで欲しい。

「翠星様を心から愛し、一生涯大切にすると誓います。」

「水心、わたしは命を救われてから今まで水心を想い続けている。そして夫婦の誓いを立てると決めている。どうか晋王妃になって欲しい。玉謹の妻に……。」

「玉謹の腕にある玉、うれしかった。わたしは再会でできれば必ず玉謹の妻になると決めていた。水心は晋王玉謹の妻として愛し合い、助け合い、生涯共に生きることを誓います。」

衛星と翠月の子はそれぞれ想い人を伴侶にした。これからの平安の世は、次の世代へと受け継がれる。

翠月は晋王を抹殺し、西夏へと帰還した。疲れきった身体をとにかく休める。

「翠月、目が覚めたか。」

「嘉慶様、ここは。」

「寝所だ。3日間眠り続けていたのだ。侍医に脈を診てもらおう。」

「殿下、おめでとうございます。妃殿下はご懐妊されました。そろそろ3月かと。」

「ほんとか。やったぞ、翠月。」

「まさかこの年で子宝に恵まれるとは思いませんでした。」

「殿下、妃殿下の年齢を考えて安静を心がけてください。乗馬や武術は厳禁です。」

「もちろんだ。翠星が鎮北王府に行ったので、美しい公主であればなおうれしい。嘉月も喜ぶぞ。」

「こればかりはわたしでもわかりません。」

翠月は驚く。予期せぬ懐妊だ。翠星は鎮北王府に、玉謹は新王に即位。それぞれ想い人と生涯を共にする。わたしは余程西夏と縁が深いのか。きっと女兒だ。

しばらくは燕の再興、交易に即位の礼、鎮北王府の継承など目まぐるしく動くだろう。

出産、子育てに十分の月日がある。まだ月牙泉の隠棲は先になりそうだ。

## 愛する人と永遠に。

嘉慶との間に皇子嘉月、皇女翠嘉をもうけ、西夏も安泰。

玉謹は水心とともに晋王、皇后として統治し、翠星は陽西を婿に迎え、鎮北王府は兄晋王を支える。北臨と晋によって旧燕は再生し、各国の交易は盛んになり平安の世が続く。

いつものように、翠月の寝所から皇宮に向かう嘉慶の身支度を整える。

「昨夜はさらに妖艶な翠月に翻弄された。いつまでも刺激してくれる翠月とは離れられない運命だろう。」

「ずっと愛してくださる嘉慶様と共にいられて翠月は幸せです。心より感謝します。」

翠月は嘉慶が見えなくなるまで見送る。俗世から離れる時が来たのだ。

香月、草月とともに西夏を去る。

「嘉慶様、翠月は俗世の使命をそろそろ終えて、巫族の村へ還ります。どうか、嘉月、翠嘉をよろしく願いいたします。女子として妻として、母として悔いのない日々を送れたことに感謝します。どうかお幸せに。」

最後の筆 翠月 」

「父上、翠星です。王命によりいまから皇宮に参ります。そしてすぐに陽西殿と涼に向かう予定です。数日で戻ります。」

「こちらは心配ない。涼国への土産は持ったのか。」

「はい。秋虎叔父上と真月様とは久しぶりです。行ってまいります。」

衛星は翌朝、翠星に文を残し、鎮北王府をあとにした。

「翠星、これからは陽西殿と鎮北王府を守り、晋王玉謹を助けて益々繁栄して欲しい。わたしは、余生を愛する翠月と静かに送りたいと願う。どうか幸せに。 衛星 筆」

衛星が砂漠の月牙泉の入口に立つ。上空に鷹が舞う。

霧が晴れて月牙泉が現れた。そしてその先に神獣を従えた翠月が立っていた。

翠月に命を助けられた頃から今までの走馬灯のように蘇える。ここまで随分と長い道のりだった。

衛星は翠月の待つ月牙泉へと消えていった。

## 読者が選ぶ、推しフレーズ

読者イチ推しの時代を超えた名場面、愛の台詞をセレクトしました。

---

衛星は翠月をゆっくり寝かせ自身を重ねた。

まるで陶器のように輝く肌を余すことなく堪能する。唇から漏れる官能的な喘ぎ声にさらに欲望を掻き立てられる。やがて二人は溶け合うようになつた。

真月と名乗る女子は、いままでに見たことのない美しさだった。大きな瞳、透き通る肌、衣から透ける伸びやかな肢体。秋虎は見惚れるばかりだ。

砂漠の民ではない。ここは陽華泉、伝説の巫族だ。

秋虎は真月と向き合い、深紅の面紗を取る。真月の顔を引き寄せ唇を重ねた。甘い香りが鼻腔を抜ける。秋虎は真月を寝かせ、自分をゆっくり重ねた。

涼の軍神は天女を妻にした。

それは激しい接吻、衛星は息ができないほどだ。やがて唇が溶け合うような快感に襲われた。翠月と衛星は互いの衣を脱がしていく。唇は離さない。二人の激しい息遣いが部屋に漏れる。

嘉慶は寝台に並ぶ翠月の面紗を上げる。そこには嘉慶を見つめる翠月の瞳が輝いていた。

「翠月殿、わたしは積年の想いが叶う。身体が震えるのだ。」

「これで震えがとまります。」

翠月は嘉慶の頬を掌で包み込み唇を重ねる。

嘉慶は瞳を閉じて翠月の口づけに応えた。そしてそのまま翠月に身体を重ねた。

楊翔は天女を見た。向かう敵を次々斬り殺し、突進する姿は恐ろしく美しかった。嘉慶王子の妃と聞いた。知力、武力、胆力すべてが常人ではない。

翠星は陽西の胸に飛び込みぎゅっと抱きしめる。

陽西は戸惑いながらも翠星の背中に腕を回した。いつかは再会したいと願いながら、いつのまにか独り身が長くなった。あのかわいい女児がかくも美しく成長し、妻にしてくれなんて夢のようだ。このままずっと醒めないで欲しい。

衛星が砂漠の月牙泉の入口に立つ。上空に鷹が舞う。

霧が晴れて月牙泉が現れた。そしてその先に神獣を従えた翠月が立っていた。

翠月に命を助けられた頃から今までが走馬灯のように蘇える。ここまで随分と長い道のりだった。

衛星は翠月の待つ月牙泉へと消えていった。